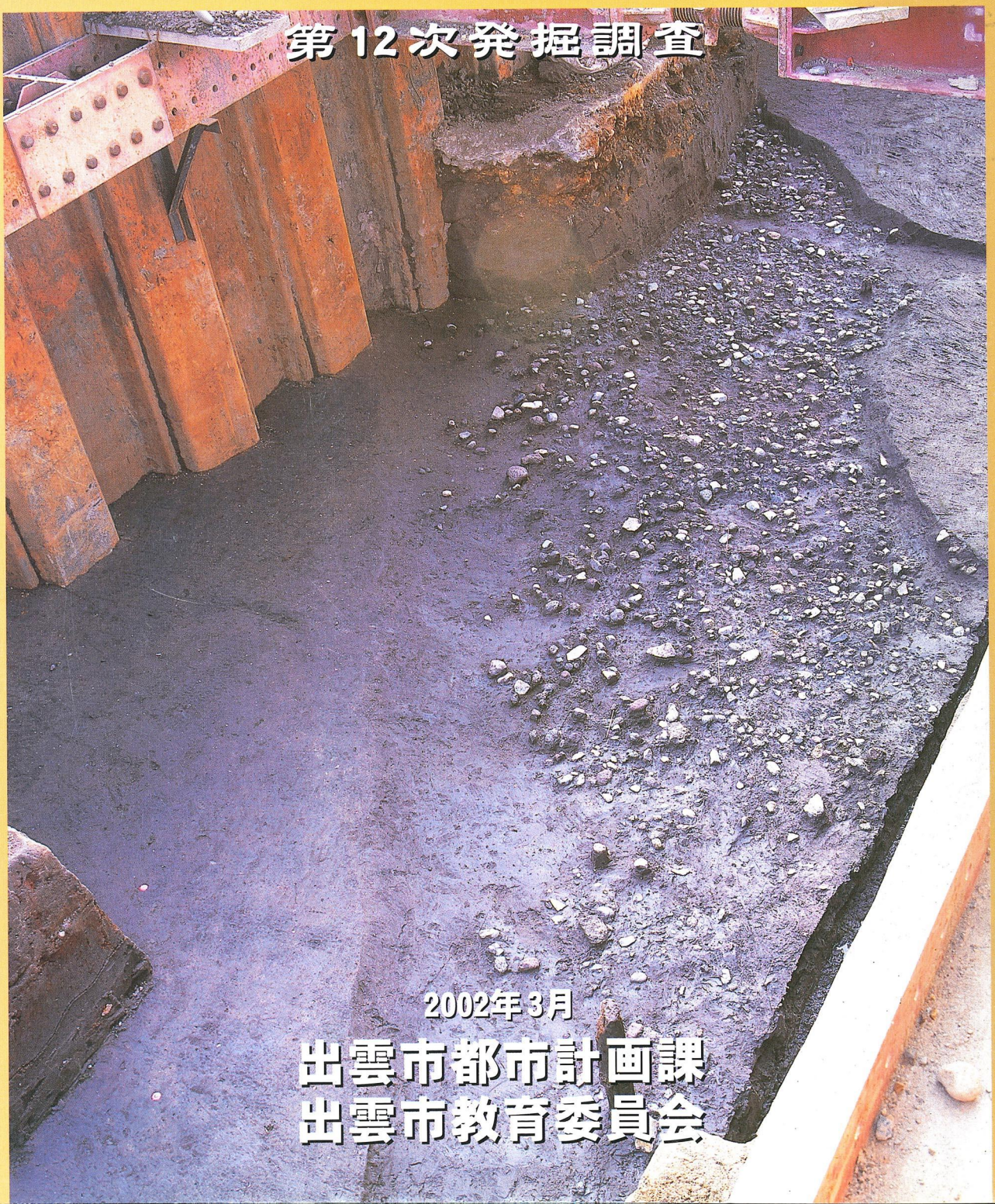
都市計画道路山陰本線南沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

天神遺跡

第12次発掘調査



2002年3月

出雲市都市計画課
出雲市教育委員会

都市計画道路山陰本線南沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

天神遺跡

（第12次発掘調査）

2002年3月

出雲市都市計画課
出雲市教育委員会

序

平成11年度に引き続き、平成12年度にも天神遺跡の発掘調査を実施いたしました。

天神遺跡は弥生時代より近世に至る複合遺跡でありますが、今回調査した場所からは近代の道状遺構や畝状遺構、中世の石敷遺構や井戸といった遺構が確認されました。

これらの遺構は中世から近代における交通や生活を解き明かす一資料として記録・調査し、このたび、その成果を報告書として皆様に公開できる運びとなりました。

最後になりましたが、出雲市都市計画課をはじめ、発掘調査にご協力くださいました皆様に御礼申し上げます。

平成14年３月

出雲市教育委員会

教育長　　多　久　　博

例　　言

1．本書は、出雲市都市計画課が施工する都市計画道路山陰本線南沿線設置工事に伴い実施した、第12次天神遺跡発掘調査の報告書である。

2．発掘調査期間

平成12年（2000）５月９日～平成12年（2000）12月21日

3．発掘調査を実施した場所

島根県出雲市塩冶有原町

4．調査組織

平成12年度（現地調査）

調査主体	出雲市教育委員会			
事務局	出雲市教育委員会　文化振興課	課長	大田　茂
		課長補佐	川上　稔
調査員		主事	高橋　智也
調査補助員		臨時職員	石橋　弥生
		同	宮崎　綾
調査指導	島根県教育庁文化財課	文化財保護主事	池淵　俊一

平成13年度（整理作業・報告書作成）

調査主体	出雲市教育委員会			
事務局	出雲市文化企画部　芸術文化振興課	文化財室	室長	川上　稔
調査員		同	主事	高橋　智也
調査補助員		同	臨時職員	今岡ひとみ

5．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＤ－溝状遺構　ＳＥ－井戸　ＳＫ－土壙状遺構　Ｐ－ピット　ＳＸ－性格不明遺構

6．本書で使用した方位は国土座標第Ⅲ系の軸方向（Ｎ）又は磁北（ＭＮ）による。

7．本書で使用している土色は『新版　標準土色帖』1996年版による。

8．本遺跡の出土遺物、実測図及び写真は出雲市教育委員会で保管している。

9．本書掲載の遺物実測図は高橋、石橋、今岡、宮崎が作成し、写真撮影は高橋が行った。なお、図面のトレースは荒木恵理子、吹野初子、園山美千代が行った。なお、墨書木札の赤外線写真撮影については島根県埋蔵文化財調査センターにご協力いただいた。

10. 遺物実測図断面は弥生土器・土師器は白抜き、須恵器は塗りつぶし、陶磁器は網かけで表現した。

11. 本書の執筆・編集は高橋が行った。

12. 調査にあたっては出雲市都市計画課、ＪＲ出雲鉄道部より多大なご協力をいただいた。

13. 発掘調査、遺物整理及び報告書執筆にあたり、次の方々にご指導、ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）
池淵　俊一（島根県教育庁文化財課）・西尾　克己・林　　健亮・守岡　正司・間野　大丞（以上、島根県埋蔵文化財調査センター）・岡　　宏三（島根県立博物館）

14. 発掘調査にあたっては次の方々に従事していただいた。（順不同）
渡部政義・小玉順子・前島正喜・岡　久夫・塚原立之・高根常代
富田　勉・福田雅美・中野治夫・吉田　栄・佐野静枝

目　　次

序

例　　言

目　　次

挿図目次

図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯と経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　天神遺跡発掘調査歴 …… 7

Ⅳ　調査報告

　　ⅰ　アクセス道部分 …… 11

　　ⅱ　１区 …… 17

　　ⅲ　２・３区 …… 23

Ⅴ　まとめ …… 43

図版

報告書抄録

挿　図　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯

第１図　調査区位置図 ……2

第２図　調査区配置図 ……2

Ⅱ　位置と環境

第３図　天神遺跡周辺主要遺跡 ……4

第４図　出雲平野主要遺跡 ……5

Ⅲ　天神遺跡発掘調査歴

第５図　天神遺跡調査区配置図……10

Ⅳ　調査報告

ⅰ．アクセス道部分

第６図　第１遺構面遺構配置図……11

第７図　アクセス道部分土層堆積状況……11

第８図　ＳＤ０１遺構実測図……12

第９図　ＳＤ０１出土遺物……12

第10図　ＳＤ０２遺構実測図……13

第11図　ＳＤ０２出土遺物……13

第12図　ＳＫ０１遺構実測図……13

第13図　ＳＫ０２遺構実測図……13

第14図　ＳＫ０４遺構実測図……14

第15図　第２遺構面遺構実測図……14

第16図　ＳＤ０４遺構実測図……15

第17図　ＳＤ０３・０６遺構実測図……15

第18図　ＳＤ０５遺構実測図……15

第19図　遺構外出土遺物……16

ⅱ．１区

第20図　１区基準杭配置図

第21図　１区遺構配置図 ……17･18

第22図　ＳＫ０１・Ｐ３・４・５
遺構実測図……19

第23図　ＳＤ０１・ＳＫ０２遺構実測図…20

第24図　１区出土遺物……21

ⅲ．２・３区

第25図　２・３区基準杭配置図

第26図　２区遺構配置図 ……23･24

第27図　３区遺構配置図 ……25･26

第28図　第１～第２遺構面出土遺物……28

第29図　第２遺構面出土遺物……29

第30図　ＳＫ０６出土遺物……30

第31図　第２～第３遺構面出土遺物……30

第32図　墨書木札実測図……30

第33図　石敷遺構実測図……31

第34図　石敷遺構出土遺物……31

第35図　２区オリーブ黒色粘土層
出土遺物……32

第36図　２区黒色粘土層出土遺物……33

第37図　３区黒色粘土層出土遺物……34

第38図　ＳＤ０２遺構実測図……34

第39図　ＳＫ０１遺構実測図……35

第40図　ＳＤ０３・ＳＫ０２・０３
遺構実測図……35

第41図　ＳＤ０１遺構実測図……35

第42図　ＳＫ０７遺構実測図……36

第43図　ＳＫ０７遺物出土状況……36

第44図　ＳＫ０９遺構実測図……37

第45図　ＳＫ０９遺物出土状況……37

第46図　ＳＫ０９出土遺物……38

第47図　ＳＥ０１遺構実測図……38

第48図　ＳＥ０１出土遺物……39

第49図　ＳＥ０２出土遺物……39

第50図　ＳＥ０２遺構実測図……40

第51図　２区遺構外出土遺物……41

第52図　３区遺構外出土遺物……42

Ⅴ　まとめ

第53図　Ｄ区合成図 ……45･46

図　版　目　次

図版１　ＳＤ０１完掘状況
ＳＤ０２完掘状況
１Ｇｒ～２Ｇｒ完掘状況
図版２　道状遺構側溝
道状遺構検出状況
畝状遺構検出状況
図版３　畝状遺構土層堆積状況
畝状遺構完掘状況
畝状遺構検出状況（第２遺構面）
図版４　畝状遺構完掘状況（第２遺構面）
石敷遺構検出状況
石敷遺構土層堆積状況
図版５　石敷遺構完掘状況
ＳＫ０７遺物出土状況
ＳＫ０７遺物出土状況（馬顎骨）
図版６　ＳＫ０７完掘状況
ＳＫ０７・ＳＥ０２
ＳＫ０９遺物出土状況
図版７　ＳＫ０９遺物出土状況
ＳＫ０９完掘状況
ＳＥ０１遺物出土状況（上層）
図版８　ＳＥ０１検出状況
ＳＥ０２完掘状況
図版９　アクセス道部分ＳＤ０１・０２・遺構外・１区・３区ＳＥ０１・２区オリーブ黒色粘土層出土遺物
図版10　２区遺構外・２区第２～第３遺構面出土遺物
図版11　２区黒色粘土層・３区黒色粘土層・３区石敷遺構・３区第１～第２遺構面・３区第２遺構面・ＳＥ０２出土遺物
図版12　３区ＳＫ０６・ＳＫ０９・遺構外出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

平成12年３月に出雲市都市計画課より、都市計画道路山陰本線南沿線の着工に先立ち埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあった。工事予定地に隣接するＪＲ高架建設の際の発掘調査では近世の道状遺構及び畝状遺構、中世の石敷遺構などが検出されているため、出雲市教育委員会においては試掘調査をせずに本調査を実施する意向を伝えた。その後、協議を重ね平成12年度当初より調査を実施することで合意した。また、当該地はアクセス道部分以外はＪＲ近接地であるため、ＪＲ西日本出雲鉄道部と協議の上、安全を確保するために矢板及び切梁を設置した上で調査を実施しなければならなかった。

調査の経過

天神遺跡第12次発掘調査の対象となった工事予定地は、都市計画道路山陰本線南沿線の本体部分及び北側現道より本体部分に連結するためのアクセス道部分に分かれる。本体部分については現在使用されている用水が調査区を分断すること及び調査区の延長が約120mと長いことから３区間に分割して調査を進めることとした。

アクセス道部分

平成12年５月９日～平成12年６月５日

調査区が４ｍ×８ｍと小さく、ベルトコンベア等機材の準備及び矢板の設置の必要がなかったため、道路本体部分に先駆けて調査を実施した。

１区

平成12年８月１日～平成12年９月13日

排土置場が遠かったこともあり、ベルトコンベアが使用できるようになった８月当初より調査を開始した。調査区は幅５ｍ延長28mである。

２区

平成12年７月３日～平成12年９月29日

表土掘削及び矢板切梁の設置終了後に調査に着手した。幅５ｍ延長100mの調査区であるが、廃棄されていた用水路の残骸に阻まれ、実際には調査範囲の幅が１ｍ程狭くなってしまった。また、遺構面が予想よりも深く、豪雨による土層観察用の壁面の崩壊等があり発掘調査現場の維持にかなりの時間を費やしている。

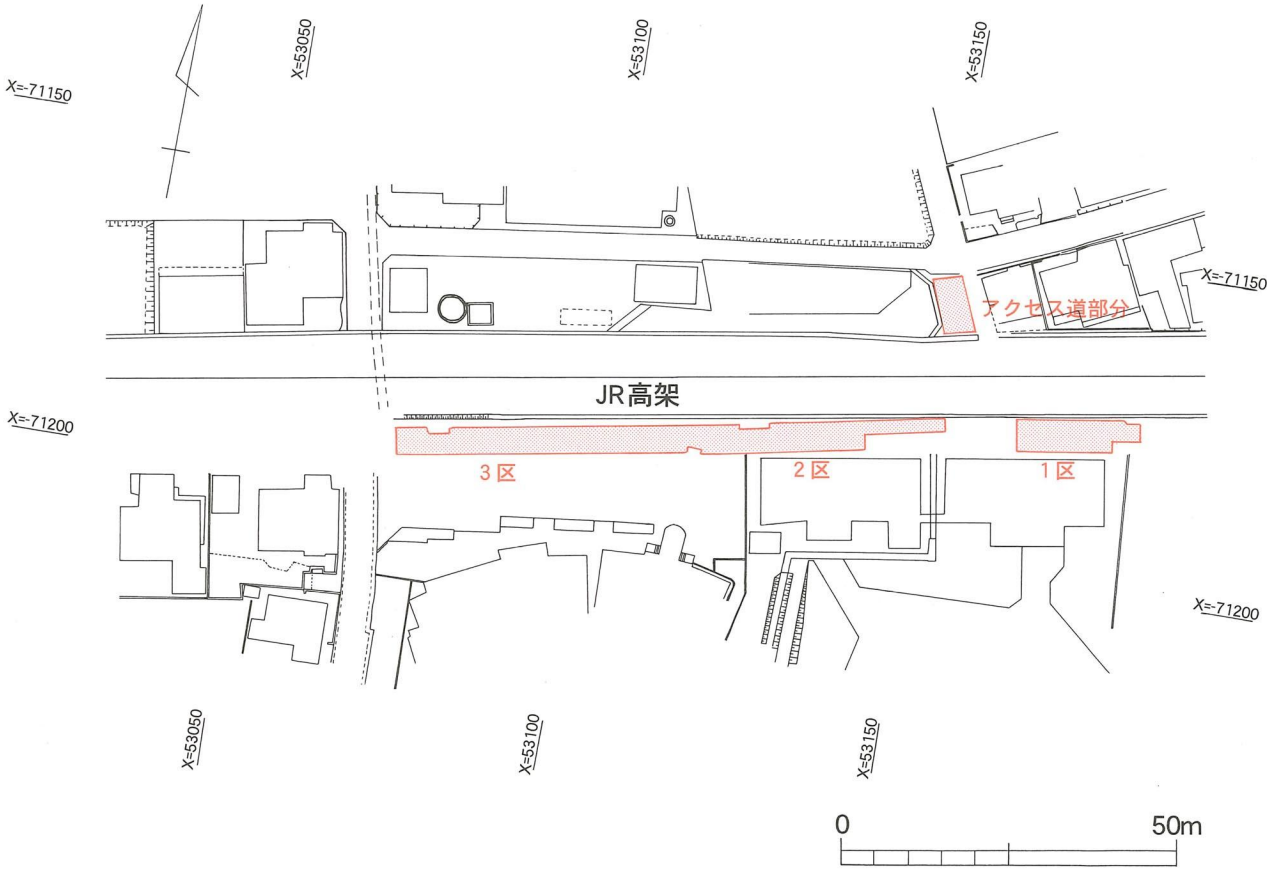
３区

平成12年10月10日～平成12年12月21日

２区と一連の調査区であるが、調査区の延長が非常に長いことと２区を調査する際に排土置場確保の必要があったため、１・２区終了後に表土掘削及び切梁の設置を実施し調査を開始した。

全ての現地調査は平成12年12月21日をもって終了した。その後、出土遺物や図面の整理を引き続き平成13年度に行い、調査報告書の作成業務を実施した。

第１図　　調査区位置図



第２図　調査区配置図

Ⅱ　位置と環境

天神遺跡は島根県出雲市天神町・塩冶町・塩冶有原町にまたがる広範囲に位置する。この地域は斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された出雲平野の中心にあたり、これらの河川による自然堤防の微高地に人々の生活が営まれた。

このころの出雲平野の様子を見ておこう。

旧石器・縄文時代

天神遺跡に人々の進出する以前、旧石器・縄文時代には平野部への人々の進出は非常に少ない。そのほとんどが平野縁辺部に位置しており、最も早くは縄文時代早期末の上長浜貝塚が営まれる。その後、菱根遺跡（大社町）が形成され、縄文時代後期前半になると神戸川が平野に流れ出る場所に三田谷遺跡が営まれるようになる。このうち三田谷Ⅰ遺跡では縄文時代後期前半の堰き止め湖が検出され、この湖沼からは同時期の縄文土器片及び丸木舟が出土し注目されている[1]。

平野部では矢野遺跡、蔵小路西遺跡、善行寺遺跡に縄文土器の出土がみられる。

弥生時代

弥生時代前期にはいっても矢野遺跡、三田谷遺跡といった遺跡が継続して営まれるが、本格的に平野部への人々の進出は弥生時代中期になってのことである。天神遺跡に人が進出してくるのもこの時期である。この時期より営まれ始めた天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの集落は古墳時代初頭まで盛行していく。

古墳時代

古墳時代初頭までは天神遺跡をはじめとする弥生時代の集落は継続して営まれるが、前期になるとこれらの集落は消滅していく。前期古墳の数も非常に少なく、山地古墳・大寺古墳・西谷７号墳といった古墳が平野縁辺部に築造されるにとどまる。中期になっても古墳の築造はまだ本格的ではなく、北光寺古墳・西谷15・16号墓といった古墳がみられるのみである。

後期にはいると古墳が多く築造されるようになる。特に後期後半になると神戸川右岸に今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳といった首長墓系列の古墳が、左岸に妙蓮寺山古墳・放れ山古墳・宝塚古墳等の地域有力者の古墳が次々と築造される。

終末期には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群などに非常に多く横穴墓が造墓されるようになり、出雲平野には多くの人が暮らしていたことがうかがえる。

奈良時代

７世紀末頃より畿内を中心として律令国家の成立が始まると、出雲平野にも国・郡制が敷かれ、出雲国神門郡と出雲郡の一部に編成された。これに伴って古志本郷遺跡では郡の官庁である郡衙（郡家）[2]が設置される。また、『出雲国風土記』には、神門郡に二所、出雲郡に一所の新造院が建立されたと記載されており、そのうち朝山新造院は神門寺境内廃寺に比定[3]されている。これ以外のこの時期における様子は、未だはっきりとしていない。

中世

794年に行われた平安京遷都にはじまるといわれる中世は、朝廷を中心とした政治体系が特徴的である。1192年に鎌倉幕府が誕生し徐々に武士の権力が増大するものの、依然として政治の中心は朝廷

であり、完全に武士へと権力が移行するのは江戸時代を待たなければならない。

出雲平野においてもこの時期の遺構としては井戸や建物跡などが認められている。しかし、これらは断片的であり、集落跡として明確に断定できるものはないのが現状である。このような中、有力豪族の館跡と考えられる遺構は矢野遺跡[(4)]（14～15世紀）・蔵小路西遺跡[(5)]（12世紀後半～15世紀　中世朝山氏惣領館？）に認められている。また、戦国時代に作られた山城も周辺には多く存在している。

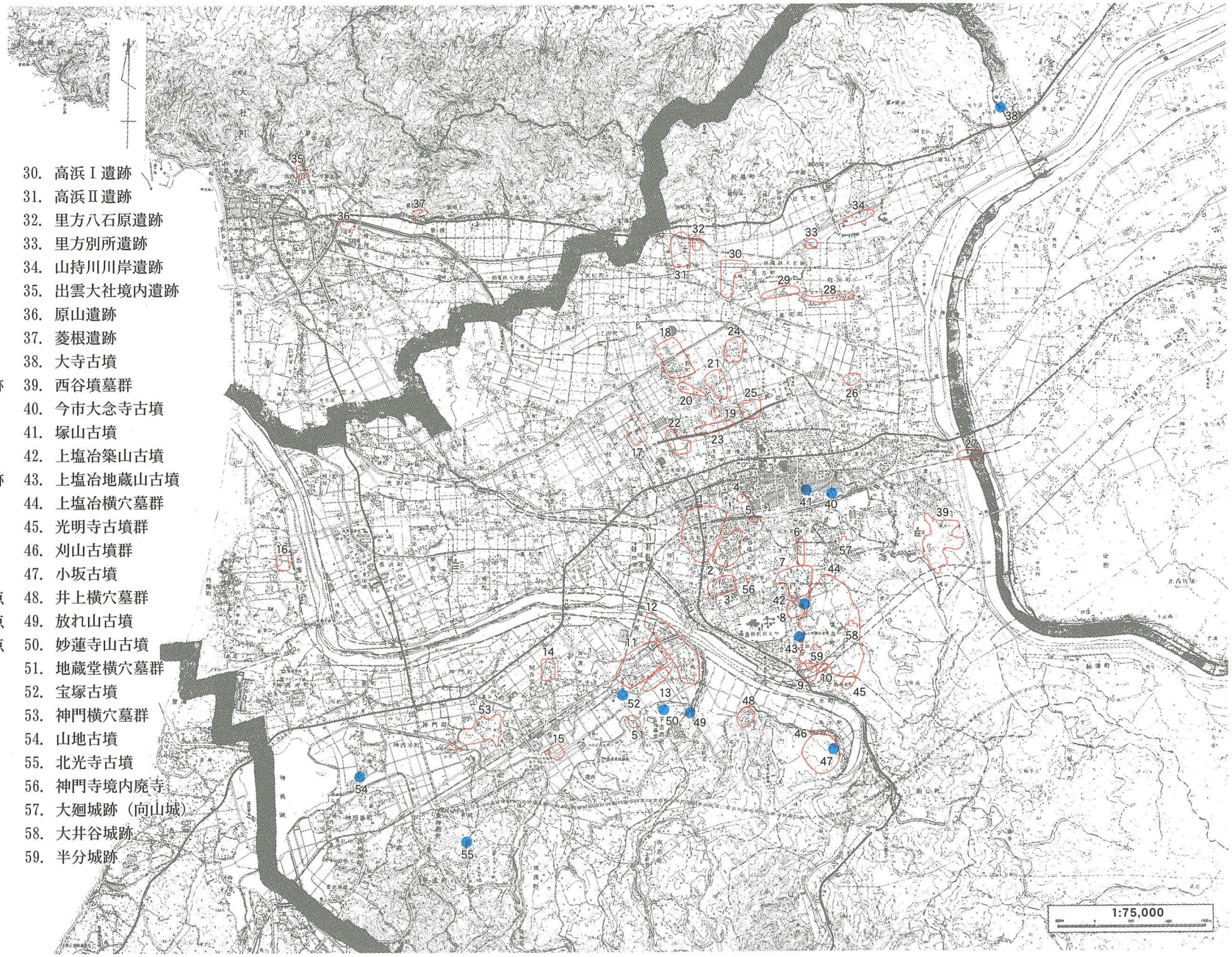
近世

関ヶ原の合戦後、出雲国には堀尾氏が封ぜられるが、その後、京極氏を経て、寛永15年（1638年）には松江に松平家が入部し、長い太平の世が始まることとなる。このころより出雲平野では木綿の栽培が盛んになり、その盛行は松江藩の専売となるほどであった。

1．天神遺跡　2．高西遺跡　3．弓原遺跡　4．海上遺跡　5．善行寺遺跡　6．角田遺跡　7．宮松遺跡
8．築山遺跡　9．三田谷Ⅰ遺跡　10．三田谷Ⅱ・Ⅲ遺跡　11．古志本郷遺跡　12．下古志遺跡　13．田畑遺跡
14．宝塚古墳　15．妙蓮寺山古墳　16．放れ山古墳　17．井上横穴墓群　18．光明寺古墳群　19．上塩冶地蔵山古墳
20．上塩冶築山古墳　21．上塩冶横穴墓群　22．今市大念寺古墳　23．塚山古墳　24．大廻城跡（向山城）
25．大井谷城跡　26．半分城跡　27．神門寺境内廃寺

第３図　天神遺跡周辺主要遺跡

1．天神遺跡
2．高西遺跡
3．弓原遺跡
4．海上遺跡
5．善行寺遺跡
6．角田遺跡
7．宮松遺跡
8．築山遺跡
9．三田谷Ⅰ遺跡
10．三田谷Ⅱ・Ⅲ遺跡
11．下古志遺跡
12．古志本郷遺跡
13．田畑遺跡
14．知井宮多聞院遺跡
15．浅柄遺跡
16．上長浜貝塚
17．白枝荒神遺跡
18．矢野遺跡
19．小山遺跡第１地点
20．小山遺跡第２地点
21．小山遺跡第３地点
22．渡橋沖遺跡
23．蔵小路西遺跡
24．大塚遺跡
25．姫原西遺跡
26．中野美保遺跡
27．斐伊川鉄橋遺跡
28．稲岡遺跡
29．高岡遺跡
30．高浜Ⅰ遺跡
31．高浜Ⅱ遺跡
32．里方八石原遺跡
33．里方別所遺跡
34．山持川川岸遺跡
35．出雲大社境内遺跡
36．原山遺跡
37．菱根遺跡
38．大寺古墳
39．西谷墳墓群
40．今市大念寺古墳
41．塚山古墳
42．上塩冶築山古墳
43．上塩冶地蔵山古墳
44．上塩冶横穴墓群
45．光明寺古墳群
46．刈山古墳群
47．小坂古墳
48．井上横穴墓群
49．放れ山古墳
50．妙蓮寺山古墳
51．地蔵堂横穴墓群
52．宝塚古墳
53．神門横穴墓群
54．山地古墳
55．北光寺古墳
56．神門寺境内廃寺
57．大廻城跡（向山城）
58．大井谷城跡
59．半分城跡



第４図　出雲平野主要遺跡

参考文献

（1）熱田貴保『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ　三田谷Ⅰ遺跡（Vol.2)』2000
建設省中国地方建設局出雲工事事務所・島根県教育委員会
（2）『斐伊川放水路発掘物語　PART５』1999　島根県埋蔵文化財調査センター
（3）川上　稔・西尾克己『神門寺境内廃寺』1985　出雲市教育委員会
（4）松山智弘『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う　矢野遺跡第２地点発掘調査報告書』1991
出雲市特別事業部・出雲市教育委員会
（5）間野大丞『蔵小路西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告　２』1999
建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
（6）『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告』1980
建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
（7）『遺跡が語る古代の出雲－出雲平野の遺跡を中心として－』1997　出雲市教育委員会
（8）『図説　島根県の歴史』1997　河出書房新社

Ⅲ　天神遺跡発掘調査歴

天神遺跡は1971（昭和46）年に第１次調査が実施されて以来、12次にわたって発掘調査が為されてきた。そのほとんどが開発に伴う発掘調査であり部分部分の調査であることから、その全貌は明らかとはなっていないが、これまでの発掘調査成果より弥生時代中期を初現として近世に至るまでの複合遺跡であることが知られている。ここでは、第１次調査から順を追って発掘調査の概要を振り返ってみたい。

第１次調査（昭和46年）

土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施されており、天神遺跡の発見の契機となった調査でもある。

現在の塩冶有原町内の６カ所にトレンチを設け、発掘調査を実施した。弥生時代中期中葉の壺棺墓や掘建柱建物２棟が検出されている。建物跡は奈良時代のものと考えられ、調査区の近くより墨書土器が出土していることから、地方官衙の存在が指摘された。

文　献：『出雲市天神遺跡　調査の記録』1972　島根県出雲市

第２次調査（昭和50年）

島根医科大学教職員宿舎の建設に伴い、発掘調査が実施された。

弥生時代中期中葉の土壙墓群や同時期の溝状遺構も確認されている。また、古墳時代後期から奈良時代、中世、近世の各時期の掘建柱建物跡も確認されており、古墳時代後期から奈良時代のものは２間以上×４間以上の大型と考えられることから、官衙的性格を持つことが指摘されている。

文　献：『天神遺跡』1977　島根県出雲市

第３次調査（昭和53年）

天神遺跡の最南端に３カ所のトレンチを設け、発掘調査が為されている。

溝状遺構、ピットが検出されたが、そのほとんどの性格は不明であるものの、弥生時代中期から奈良時代にかけての遺物が多く出土している。

また、調査地に隣接する畑地からは墨書土器（「旱天」と書かれる）が発見された。

文　献：『古代の出雲を考えるⅠ　天神遺跡の諸問題－'78年発掘調査報告－』1979　出雲考古学研究会

第４次調査（昭和56年）

建設省職員宿舎の建設に伴い発掘調査が実施された。

溝状遺構・掘建柱建物跡・土壙が検出されている。これらの遺構はそのほとんどが中世に属するものであった。このうち溝状遺構は対照的に検出されており、屋敷地を囲うための区画溝の可能性が指摘されている。土壙からは土師器などの出土遺物が認められたが、その性格については明らかとなっていない。

文　献：『建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書』1982　出雲市教育委員会

第５次調査（昭和60～61年）

建設省出雲工事事務所新庁舎建設に伴い発掘調査が実施された。

溝状遺構・土壙・竪穴住居跡などが確認されている。このうちには弥生時代中期の土壙墓と考えられるものや古墳時代後期の竪穴住居跡が存在することから、これらの時期には天神遺跡で生活が営まれていたことが指摘されている。

文　献：『建設省新庁舎建築に伴う天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ』1986　出雲市教育委員会

第６次調査（昭和61年）

天神遺跡の範囲を確認するために５カ所のトレンチを設け、発掘調査が実施された。

中世の溝状遺構や弥生時代中期の大溝、大型のピットなどが確認されている。大型のピットは建物跡である可能性が考えられている。

文　献：『塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ』1987　出雲市教育委員会

第７次調査（平成６年）

ＪＲ山陰本線高架建設に伴い、発掘調査が実施された。多くの遺構・遺物が確認されたが、特筆すべきは、弥生時代の環壕の存在である。弥生時代中期のものが２条、弥生時代終末期から古墳時代初頭と考えられるもの２条が検出されており、遺構内からは非常に多くの土器が出土している。

また、Ｃ区においては弥生時代中期の木製品が大量に出土し、衣笠形木製品や連結未製品鍬などが認められている。

文　献：『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997　島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

第８次調査（平成６年）

天神遺跡の発掘調査区の中で最も西北に位置する調査区である。

溝状遺構・土壙などが検出されているが、中世の溝はこれ以西に遺構が認められていないために、集落の区画溝である可能性が指摘されている。また、古墳時代後期の土壙墓も確認され、遺構内より須恵器坏身・鉄鏃が出土している。

文　献：『建設省職員宿舎新築工事に伴う　天神遺跡第８次発掘調査報告書』1996　出雲市教育委員会

第９次調査（平成９年）

第７次調査と同様、ＪＲ高架建設に伴い発掘調査が実施された。弥生時代中期の溝状遺構、弥生時代終末期から古墳時代初頭の溝状遺構・落ち込み状遺構、古代から中世の井戸・土壙などが検出されている。また、11～12世紀と考えられる土壙よりは側板や杭がみられ、木枠の井戸の可能性が指摘されている。

文　献：『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第９次発掘調査報告書』1999　島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

第10次調査（平成11年）

都市計画道路山陰本線北沿線の設置工事に伴いＪＲ高架の隣接地の調査を実施した。この調査区は第７次調査の北側に接しており、第７次調査の際に検出した弥生時代の環壕と考えられる４条の大溝の続きを確認するとともに竪穴住居や方形周溝墓も検出した。

また、それらの西側の自然河道では第７次調査と同様に弥生時代中期の木製品が大量に出土した。

文　献：『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　天神遺跡（第10次発掘調査）』2002

島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

第11次調査（平成11年）

社団法人中国建設弘済会事務所建設に伴い発掘調査を実施した。第５次調査の隣接地であり、続きの確認が期待されたが、遺構面の大部分が削平及び攪乱されている状況であった。

このような状況の中ではあったが、弥生時代中期中葉の土壙墓が検出されているうえ、これらのすぐ北側に溝状遺構が確認された。この溝は土壙墓とそれ以外の区画をするものである可能性が指摘されている。

文　献：『社団法人中国建設弘済会事務所建設に伴う天神遺跡発掘調査報告書』2001　社団法人中国建設弘済会・出雲市教育委員会

第12次調査（平成12年）

第７次調査Ｄ区の南側に隣接する調査区である。詳細については本書で報告している。

数字は調査次を示す

第５図　天神遺跡調査区配置図

Ⅳ　調査報告

i　アクセス道部分

＜調査区・立地＞

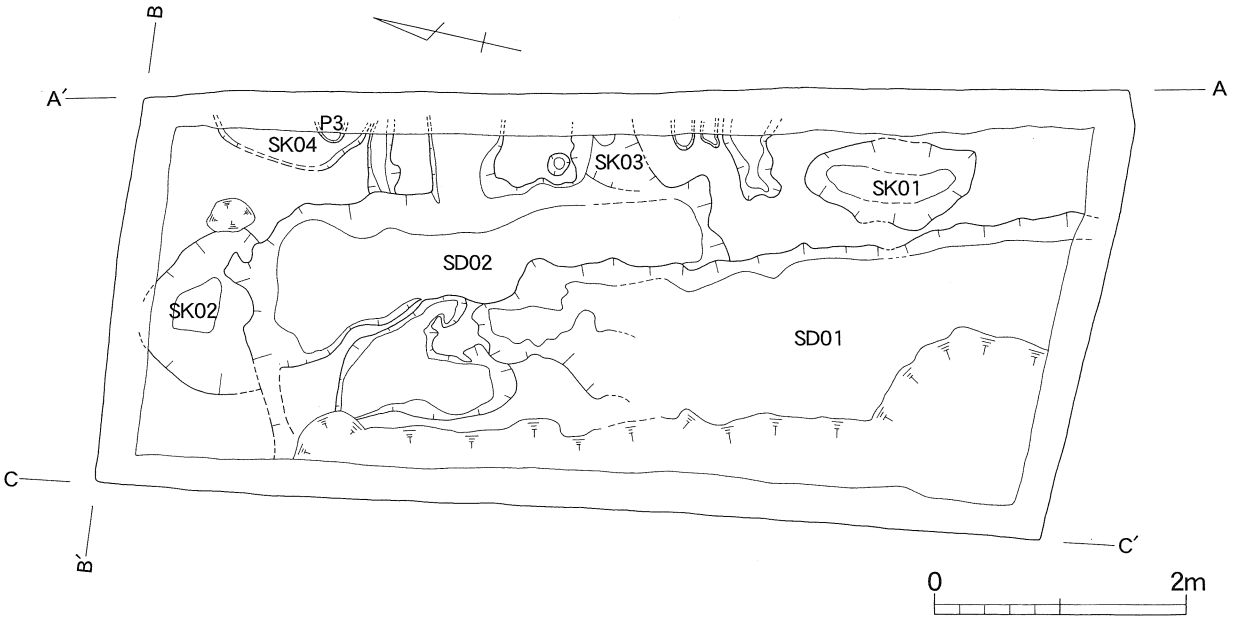
平成11年度（第10次調査）調査地東端の北側に位置し、約４ｍ×約８ｍの狭い調査区である。この調査区においては遺構面が２面認められた。

＜基本層序＞

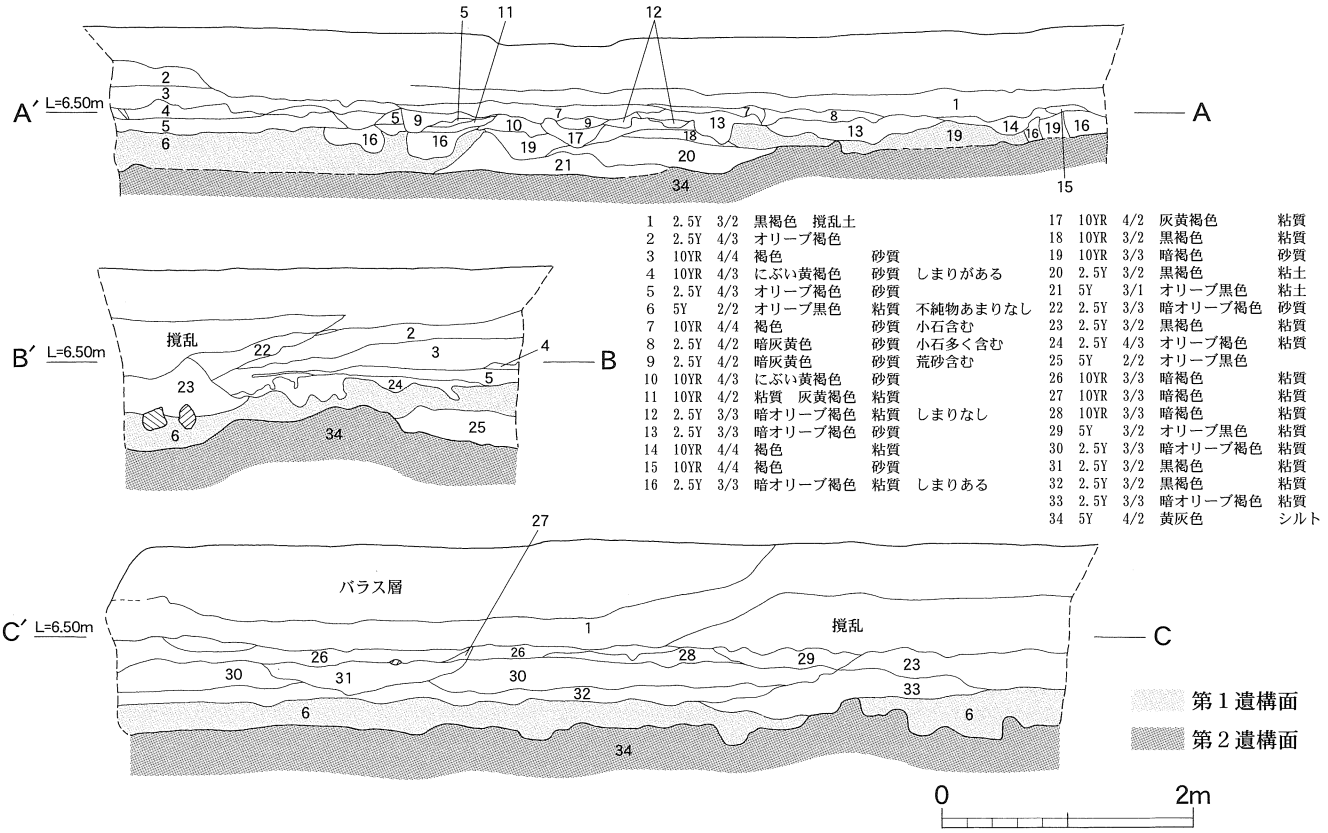
標高6.6m付近までは現代の攪乱土の堆積がみられ、調査はこれらを重機で除去した段階より開始した。攪乱土を除去すると褐色砂質土（12）の堆積が一面にみられた。この層は10～15cmほど堆積しており、この下面が第１遺構面（標高6.5m～6.6m）である。また、第１遺構面を除去するとその直下で第２遺構面（標高6.4m～6.5m）が露出する。

＜第１遺構面＞　（第６図・第７図）

標高約6.5m～6.6mに堆積する暗褐色砂質土（19）及びオリーブ黒色粘質土（６）をベースとする遺構面である。溝状遺構２、土壙４、ピット５を検出した。そのほとんどでは出土遺物は認められず、出土したものについても非常に摩耗した小片であり図化が可能なものや時期を明確に比定できるものはまったくない。



第６図　第１遺構面遺構配置図



1	2.5Y	3/2	黒褐色　撹乱土		
2	2.5Y	4/3	オリーブ褐色		
3	10YR	4/4	褐色	砂質	
4	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	しまりがある
5	2.5Y	4/3	オリーブ褐色	砂質	
6	5Y	2/2	オリーブ黒色	粘質	不純物あまりなし
7	10YR	4/4	褐色	砂質	小石含む
8	2.5Y	4/2	暗灰黄色	砂質	小石多く含む
9	2.5Y	4/2	暗灰黄色	砂質	荒砂含む
10	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	
11	10YR	4/2	粘質　灰黄褐色	粘質	
12	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	粘質	しまりなし
13	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	
14	10YR	4/4	褐色	粘質	
15	10YR	4/4	褐色	砂質	
16	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	粘質	しまりある
17	10YR	4/2	灰黄褐色	粘質	しまりなし
18	10YR	3/2	黒褐色	粘質	しまりなし
19	10YR	3/3	暗褐色	砂質	よくしまる
20	2.5Y	3/2	黒褐色	粘土	しまりなし
21	5Y	3/1	オリーブ黒色	粘土	
22	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	
23	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	しまりなし
24	2.5Y	4/3	オリーブ褐色	粘質	しまりある
25	5Y	2/2	オリーブ黒色		
26	10YR	3/3	暗褐色	粘質	
27	10YR	3/3	暗褐色	粘質	しまりなし
28	10YR	3/3	暗褐色	粘質	
29	5Y	3/2	オリーブ黒色	粘質	しまりなし
30	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	粘質	
31	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	しまりなし
32	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	
33	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	粘質	よくしまる
34	5Y	4/2	黄灰色	シルト	

第７図　アクセス道部分土層堆積状況

【溝状遺構】

ＳＤ０１（第８図）

遺構形状・規模

調査区の西半部で検出できた溝状遺構である。幅1.4m以上、深さ0.15mを測る。遺構南側は調査区外へと延びていく。北側は幅が狭くなってきており、調査区内で閉じている。西側については攪乱を受けているために、更に延びるのかどうかは不明であるが横断断面形（Ａ－Ａ’）よりみると深くなる傾向がみられるために調査区外に延びていると考えられる。

土層堆積状況

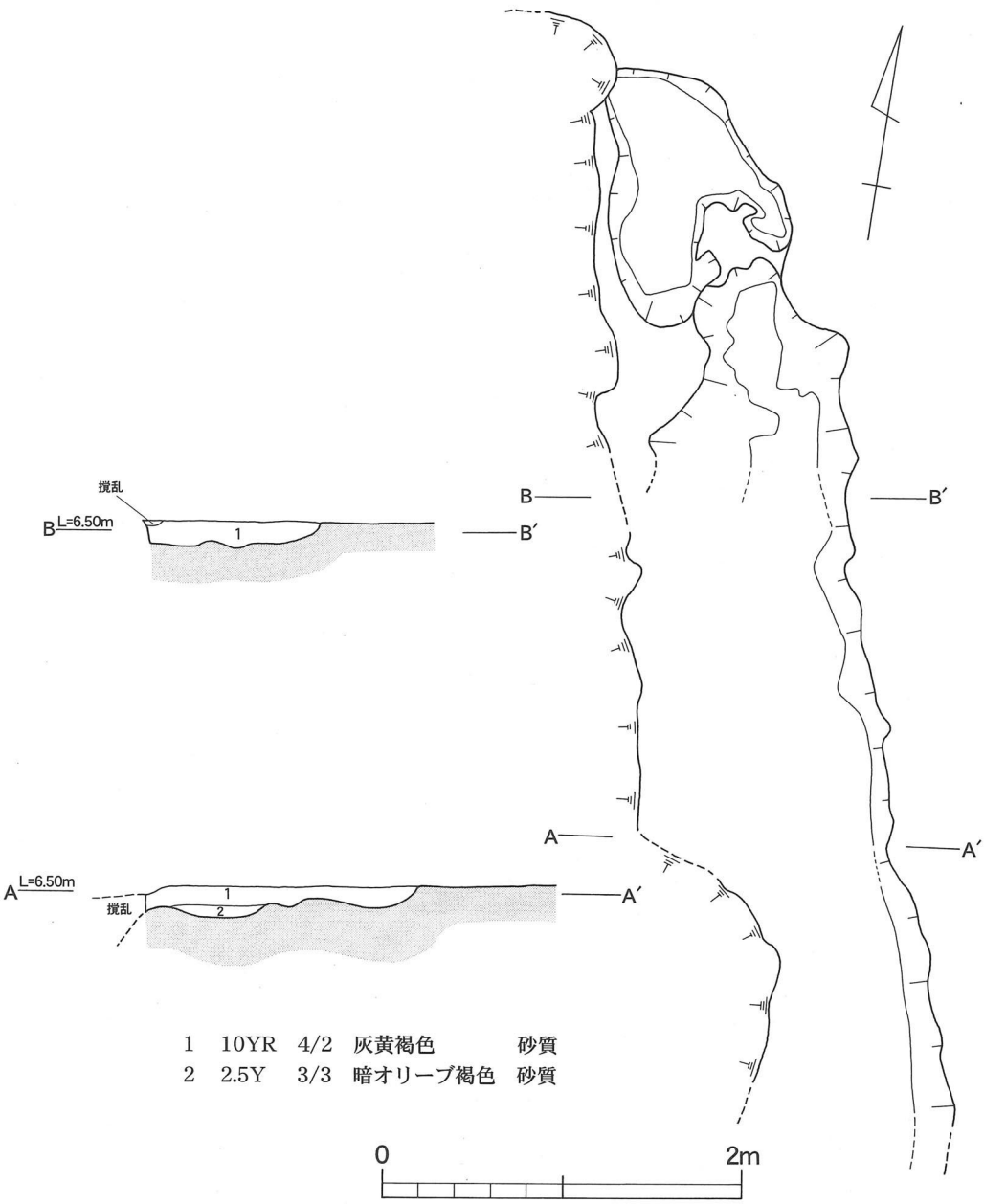
埋土はほぼ１層であり、灰黄褐色砂質土（１）が堆積している。堆積には特に目立った特徴はないが、深い部分には暗オリーブ褐色砂質土（２）が堆積していた。

出土遺物（第９図）

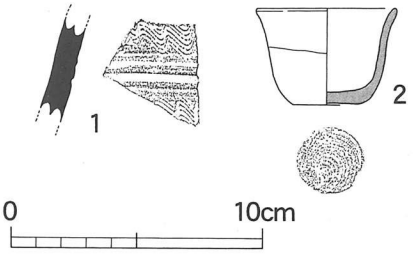
遺物は２点出土したのみである。両方とも埋土内より出土している。

１は須恵器　甕　口縁部である。小片でしか残存しておらず詳細は不明であるが、外面に２条の沈線をつけ、その上下にクシ描波状文を施している。

２は陶器の「ぐいのみ」と考えられる。内面及び外面上半に施釉している。18世紀以降のものと考えられる。



第８図　ＳＤ０１遺構実測図

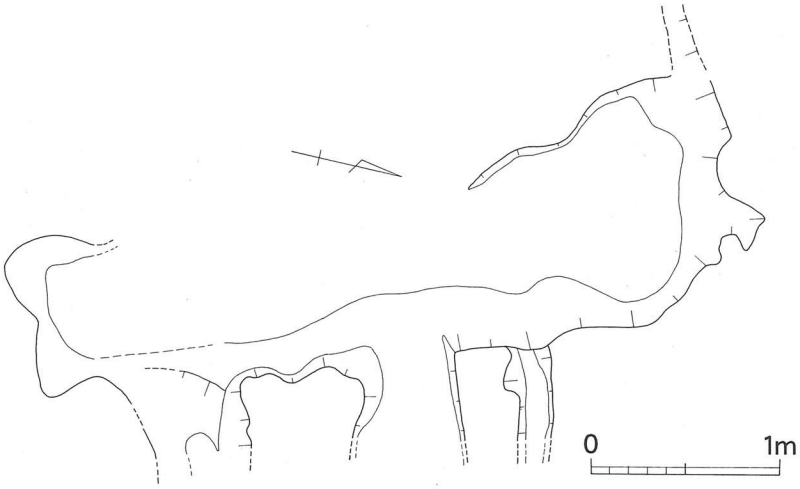


第９図　ＳＤ０１出土遺物

ＳＤ０２（第10図）

遺構形状・規模

現存幅1.3m、深さ0.2mを測る。東西方向に3.8m延びており、溝状遺構である可能性が高いが、現代の攪乱とＳＤ０１によって切られているため、西側の様子についてはうかがい知ることができない。



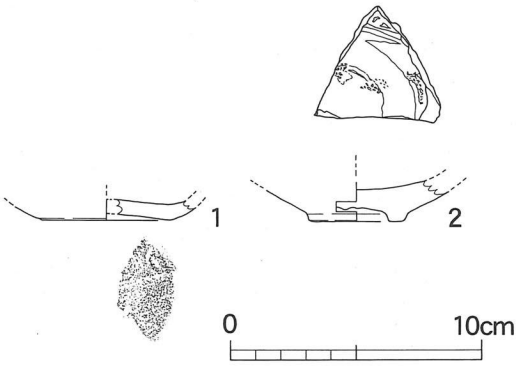
第10図　ＳＤ０２遺構実測図

出土遺物（第11図）

遺物は２点出土した。埋土内よりの出土である。

１は土師器　皿　である。底部は糸切りであり、中世以降のものであると考えられる。

２は陶器　坏　である。肥前系陶器と考えられ、高台部は削りだしている。



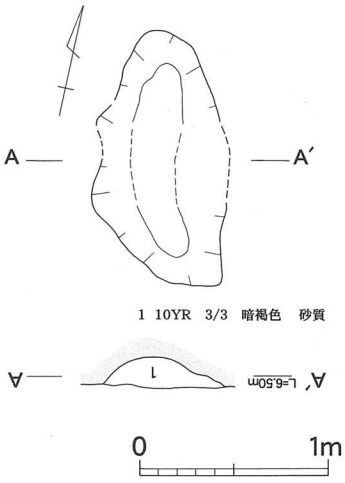
第11図　ＳＤ０２出土遺物

【土壙】

ＳＫ０１（第12図）

遺構形状・規模

南北1.4m、東西0.7m、深さ0.15mの幅広の楕円形を呈する土壙である。遺構内からの遺物出土はなく、時期や遺構の性格については不明である。

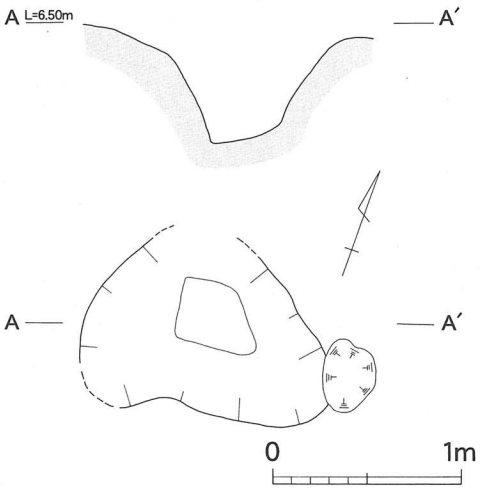


第12図　ＳＫ０１遺構実測図

ＳＫ０２（第13図）

遺構形状・規模

調査区の北側で検出できた土壙である。ＳＤ０２で切られているが、最大長1.35mの不正円形を呈していると思われる。なお、遺構の形態はすり鉢状を呈しており、他の遺構のどれよりも深く、0.6mを測る。



第13図　ＳＫ０２遺構実測図

ＳＫ０３（第６図）

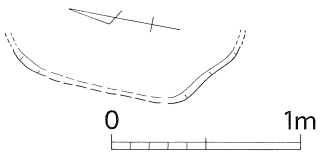
遺構形状・規模

切り合い関係より独立した遺構であると考えられるため土壙の扱いにした。しかし、サブトレンチに大半がかかっている上にＳＤ０２で切られており、はっきりとした形状を確認することは困難である。

ＳＫ０４（第14図）

遺構形状・規模

調査区外に延びている土壙である。南北1.2m以上、東西0.6m以上を測る。検出できたのが遺構の一部であることと、出土遺物もないことから、時期や性格については不明である。なお、ＳＫ０４内にピットが１穴（Ｐ３）存在しているが、詳細は不明である。

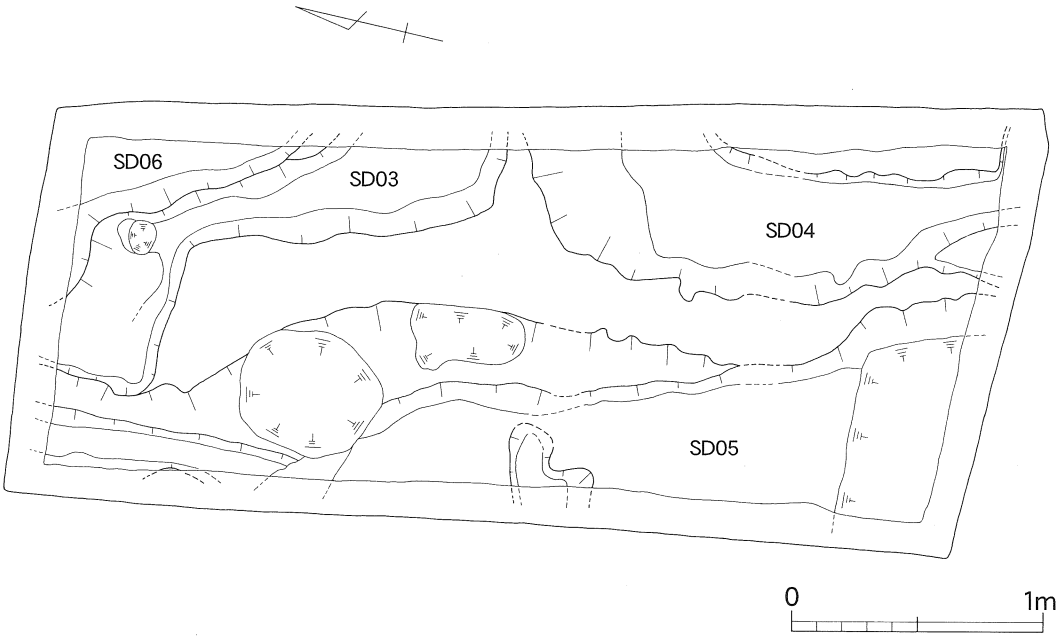


第14図　ＳＫ０４遺構実測図

第１遺構面の遺構からの出土遺物は認められないために明確な時期比定は困難であるが、後に報告する１～３区の遺構面と比較すると中世頃の可能性が高い。また、調査区の狭さゆえ遺構の全体像を掴むことが難しかった。

＜第２遺構面＞（第15図）

標高6.4m～6.5m堆積する黄灰色シルト層（34）をベースとする遺構面である。溝状遺構を４条検出した。第１遺構面と同様に時期がわかるような遺物は出土していない。ただし、第１遺構面が中・近世の堆積層と考えられることから、それ以前のものと考えられる。



第15図　第２遺構面遺構実測図

【溝状遺構】

ＳＤ０３（第17図）

遺構形状・規模

クランク状に曲がっている溝状遺構であり、土層の切り合い関係よりＳＤ０６よりも新しいと考えられる。幅は現状の広い場所で1.4m、狭い場所で0.4m、深さ0.2mを測る。東西へ走るときは幅が広くなり、南北へ走るときは幅が細くなる傾向が認められる。

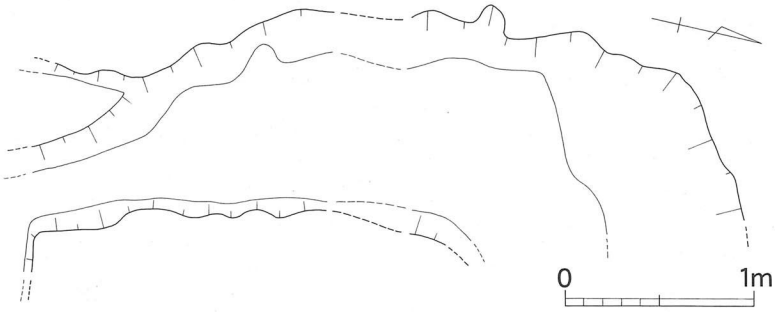
なお、出土遺物は認められなかった。

ＳＤ０４（第16図）

遺構形状・規模

最大幅1.5m、最小幅0.75mの溝状遺構である。遺構の北側及び南側は調査区外に延びているためにはっきりはしないものの、東へと延びていくようであり、「コ」字形もしくは「ロ」字形を呈していると考えられる。

出土遺物は認められない。



第16図　ＳＤ０４遺構実測図

ＳＤ０５（第18図）

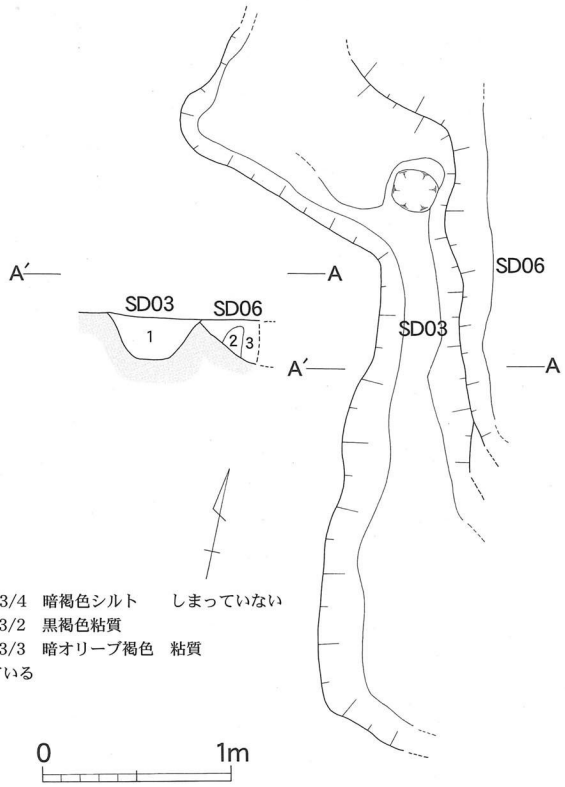
遺構形状・規模

調査区を南北に横切る溝状遺構である。西側は調査区外に延びているためにその幅を知ることはできないが、幅1.5m以上を測る。

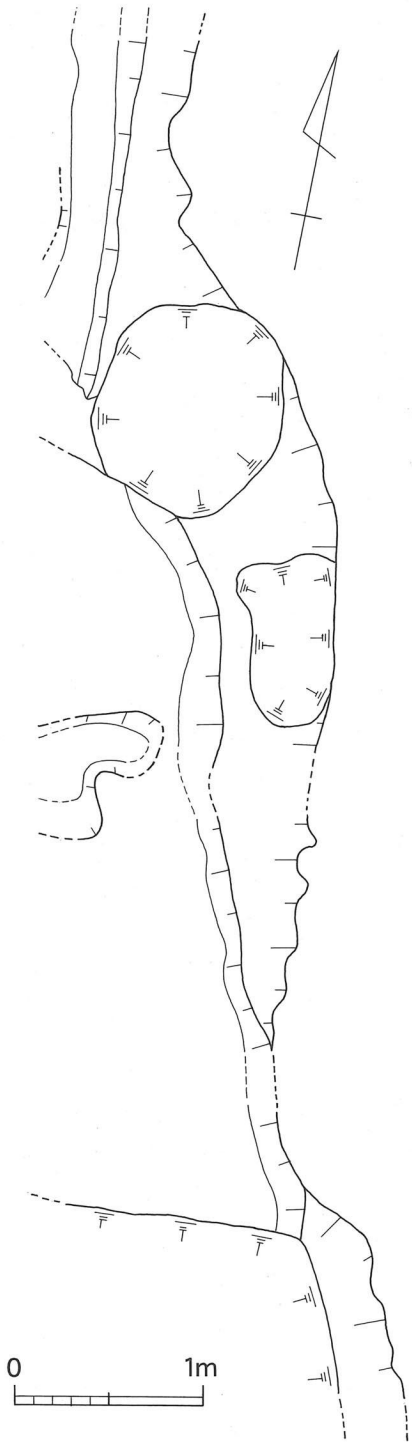
ＳＤ０６（第17図）

遺構形状・規模

調査区の北東部分にわずかに検出できた溝状遺構である。そのため幅や長さは不明であるが、遺構の西側はＳＤ０３に切られているものの、遺構の肩は若干確認できた。わずかに残された遺構肩の痕跡と遺構端から南南東から北北西へ延びているものと思われる。



第17図　ＳＤ０３・０６遺構実測図



第18図　ＳＤ０５遺構実測図

【遺構外の出土遺物】（第19図）

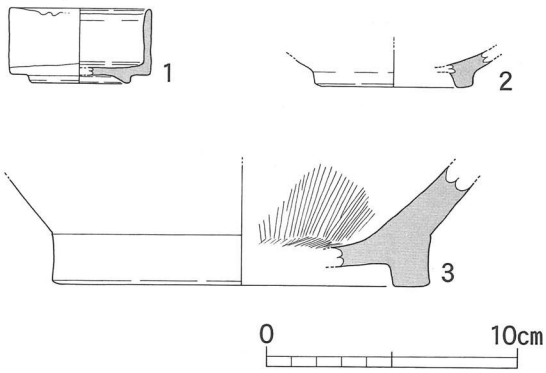
遺構外から出土した遺物のうち実測に耐えうるものは３点であった。

１は陶器　猪口　である。内面及び外面は施釉されているが、底部及び高台部については施釉されていない。

２は陶器　碗　高台部である。内面を施釉している。

３は陶器　擂鉢　である。内面の擂目は摩耗しており、使用した痕跡が認められた。

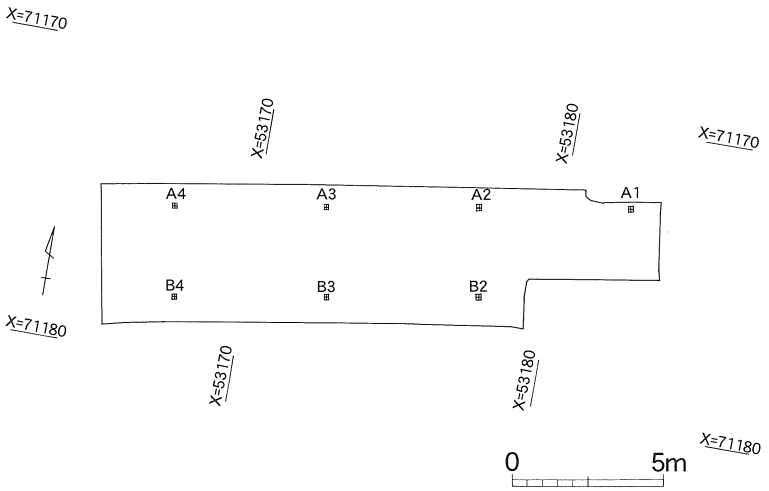
いずれの遺物も近世～近代のものであると考えられる。



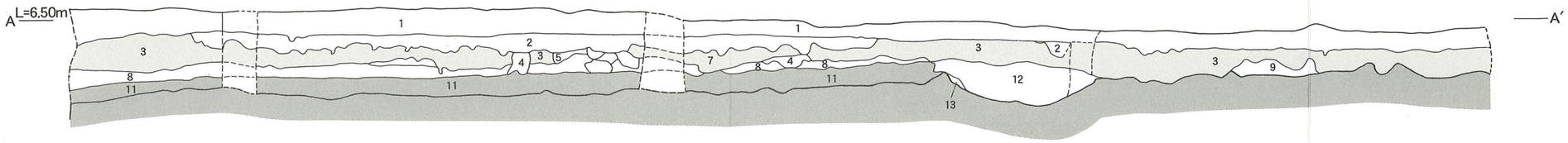
第19図　遺構外出土遺物

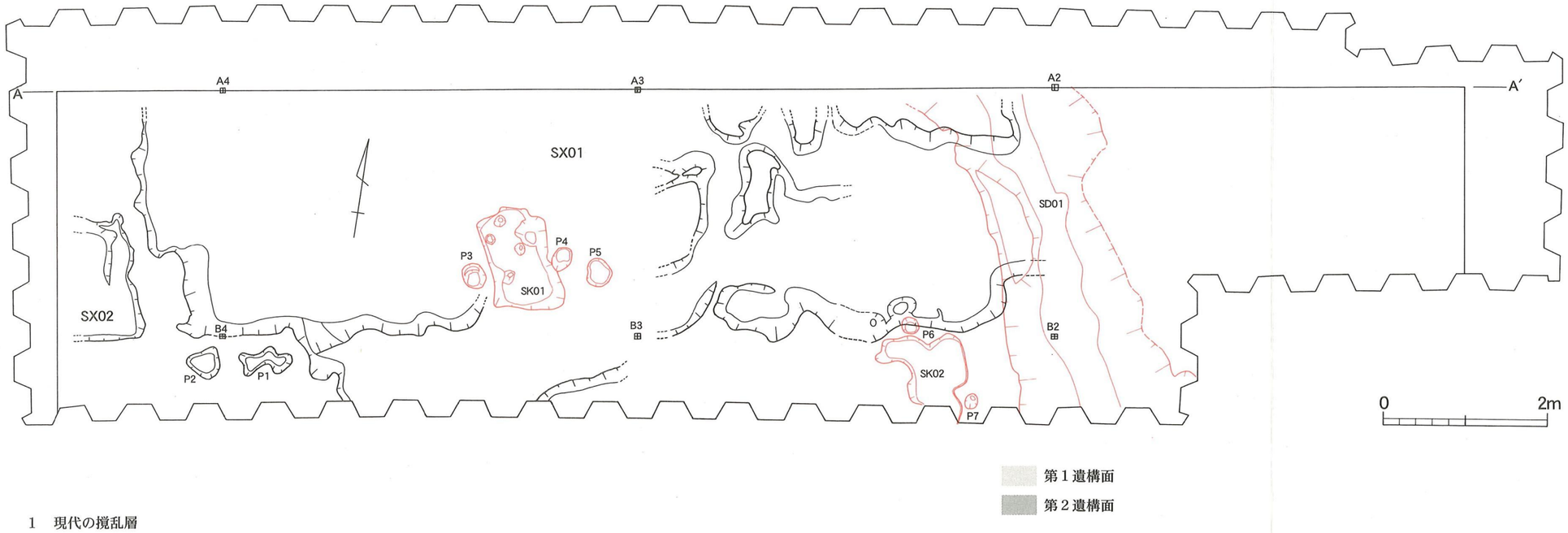
ii　1区

調査区は全調査区の最東端に位置し、既設の排水路により調査区は不正形な形状を呈する。幅５ｍ×延長28ｍを測る。標高6.4ｍ程のところまで鉄道敷設時の盛土と考えられる攪乱土が堆積していたため、これを除去した後に調査を開始した。なお、遺構面は２面認められた。



第20図　１区基準杭配置図





1	現代の撹乱層				
2	10YR	4/2	灰黄褐色	砂質	しまりがなく、鉄分多く含む（包含層、遺構埋土）SX01
3	5Y	3/1	オリーブ黒色	粘質	しまりがない　水を多く含む（遺構面）
4	10YR	4/4	褐色	シルト	しまりがない　８とよく似る。８が変化したもの
5	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	しまりがない
6	10YR	3/2	黒褐色	粘質	しまりがない　ブロック状に混入
7	10YR	4/2	灰黄褐色	粘質	よくしまっている
8	10YR	4/4	褐色	シルト	しまりがある
9	10YR	3/3	暗褐色	砂質	しまりある　６とよく似る
10	2.5Y	4/4	オリーブ褐色	シルト	８が何らかの理由で変色したものか？
11	5Y	3/2	オリーブ黒色	シルト	しまりなし　黒色ブロックやや含む　第２遺構面
12	2.5Y	3/1	黒褐色	粘質	白色の砂やや含む　11層ベースの遺構埋土
13	5Y	3/2	オリーブ黒色	シルト	しまりなし　黒色ブロックやや含む　第２遺構面

第21図　１区遺構配置図

＜第１遺構面＞（第21図）

標高6.3m～6.4mのオリーブ黒色粘質土（３）を遺構面とする。鉄道敷設時の盛土直下で検出されるため、ある程度の削平は受けているものと考えられる。

【性格不明遺構】

ＳＸ０１（第21図）

遺構形状・規模

調査区の西半分のほとんどを占める遺構である。東西8.2m、深さ10cm程度であるが、その範囲の南北については調査区外に続いているため、溝状遺構である可能性も考えられる。攪乱土を除去した段階で露出した遺構であるため、削平されていると考えられる。

ＳＸ０２（第21図）

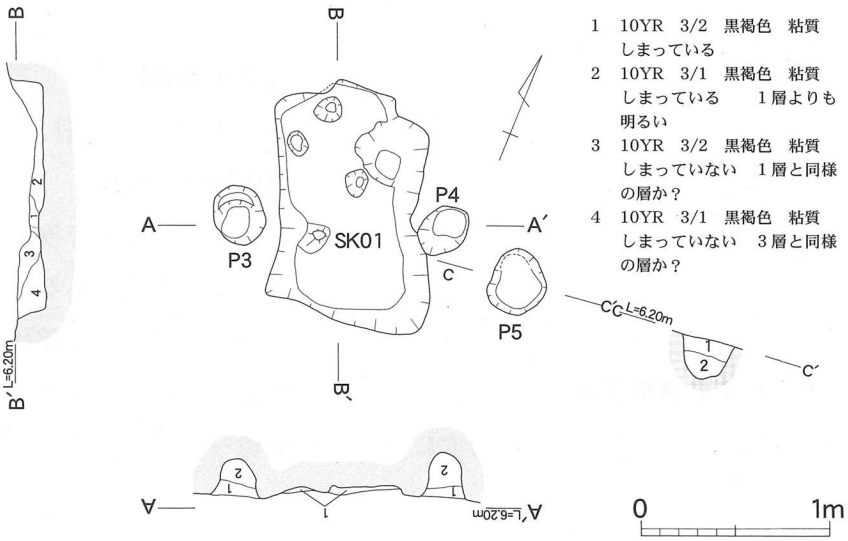
遺構形状・規模

調査区の西側より検出された遺構である。南北1.5m、深さ0.1mを測り、遺構は更に西側に延びると考えられるがその形状については溝状になるのか土壙状になるのかは不明である。

この面については後で述べる道状遺構、畝状遺構と同時期の遺構である可能性がある。あるいは畝状遺構の一環である可能性も考えられよう。

＜第２遺構面＞

この遺構面は標高5.8m～6.0mのオリーブ黒色シルト（11）をベースとする。アクセス道部分第２遺構面及び２・３区第４遺構面に対応し、今までの周辺の調査では確認されなかった遺構面である。土壙２、溝状遺構１を検出している。



第22図　ＳＫ０１・Ｐ３・４・５遺構実測図

【土壙】

ＳＫ０１（第22図）

遺構形状・規模

ＳＸ０１の底より検出した幅0.7m長さ1.2mの隅丸長方形を呈する土壙である。

深さは約0.2mを測るが、ＳＸ０１によって削平を受けている可能性があるため、実際はもう少し深かったであろう。長辺の脇には幅約20cmのピット（Ｐ３・Ｐ４）が存在しているが、ＳＫ０１に伴

うものかどうかは不明である。また、Ｐ４のすぐそばにも同様のピット（Ｐ５）が認められる。

土層堆積状況

黒褐色の粘質土で構成される。しまりの違いにより分層することができたが、基本的には同一の層であると考えられる。

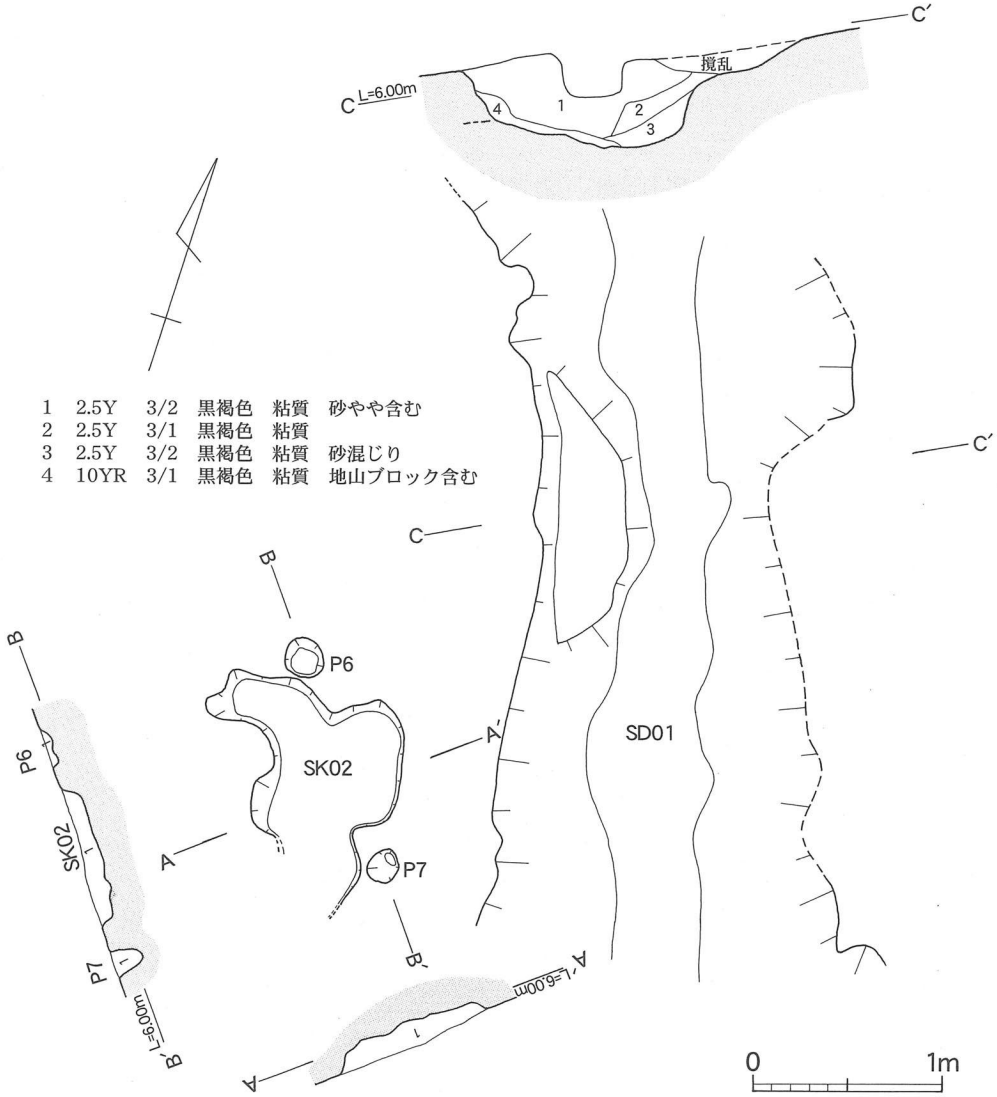
遺構の時期・性格

遺構内からの出土遺物はなく、この遺構の時期や性格は不明である。

ＳＫ０２（第23図）

遺構形状・規模

ＳＤ０１の西側に位置する土壙である。最大幅95cm、深さ約10cm程度で形状は不正形である。遺構の北西と南東にＰ６・Ｐ７が検出されているがＳＫ０２に伴うものかどうかは不明である。なお、Ｐ７は深さ15cm程あり、柱穴の可能性がある。



第23図　ＳＤ０１・ＳＫ０２遺構実測図

土層堆積状況

埋土は黒褐色粘質土１層で構成される。

遺構の時期・性格

遺構内からの出土遺物はなく、時期や性格は不明である。

【溝状遺構】

ＳＤ０１（第23図）

遺構形状・規模

調査区の東側で検出した溝状遺構である。

西側については現代の撹乱によって削平を受けているものの、幅2.0m、深さ0.5mを測り、南東から北西方向に調査区を横切っている。

土層堆積状況

遺構埋土として黒褐色粘質土が堆積する。３層が砂混じり層であることから、一時期は水が流れていた可能性が考えられる。また、２・４層上面は掘り返しの痕跡である可能性が高い。

出土遺物

土師質土器の小片が１点認められたが、小片ゆえ時期を比定することは困難である。

【１区の出土遺物】（第24図）

１区の出土遺物は非常に少ないが、若干、実測に耐えうるものがあったために報告しておく。

１は瓦質土器　壺　口縁部と考えられ、Ｐ４から出土した。外面に多くの列点文が確認できる。時期としては不明である。

２は磁器　碗　である。内外面とも乳白色に施釉される。

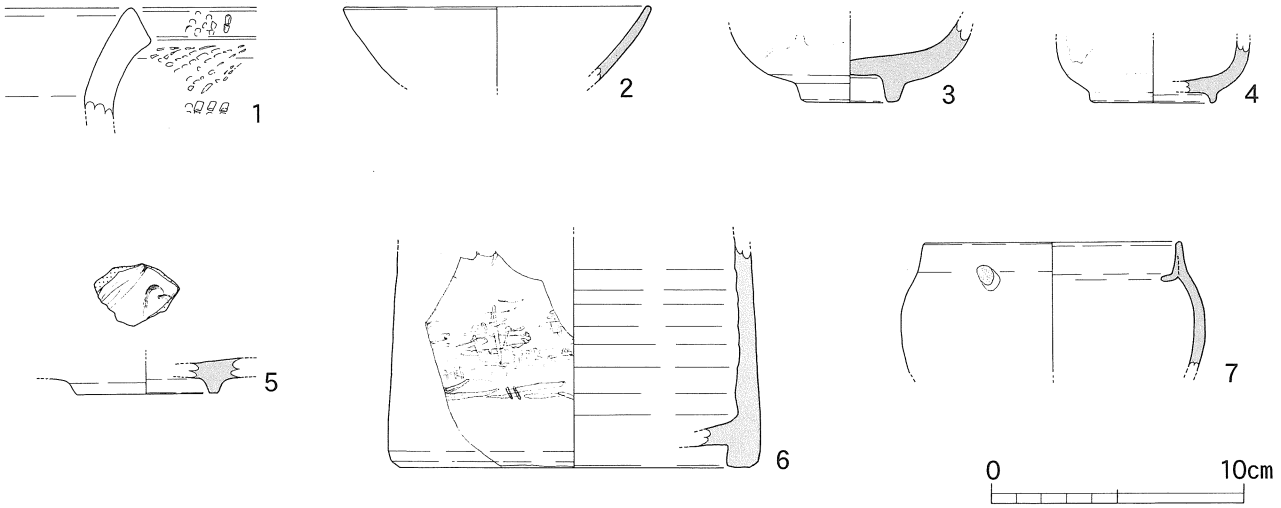
３は陶器　碗　である。内外面とも施釉が見られ、外面には茶色の染め付けを施している。

４・５は伊万里焼　碗　の底部である。４は高台部外面及び体部に１本の線が染め付けられている。５は内外面とも施釉され、見込み部分には藍色で植物と考えられる文様が施されている。いずれも17世紀のものと考えられる。

６は陶器　花瓶　の可能性があるものである。外面のみ施釉されており、藍色で草木の文様があしらわれている。

７は陶器　土瓶　である。内面に蓋を受けるための受部が作られており、外面には把手の付いていた痕跡が残されている。

１～３・６・７は、いずれも近世から近代のものと考えられる。



第24図　１区出土遺物

小結

この調査区では遺物、遺構はともに少ない。遺物はそのほとんどが小片であるうえ、風化が激しく詳細は不明である。また、遺構についても不明な点が多く、遺物の出土がみられないために時期的な比定も難しい。

ただし、掘り込まれた層から

ＳＫ０１
ＳＫ０２ → ＳＸ０１
ＳＤ０１ ＳＸ０２

の時期的関係を認めることができる。

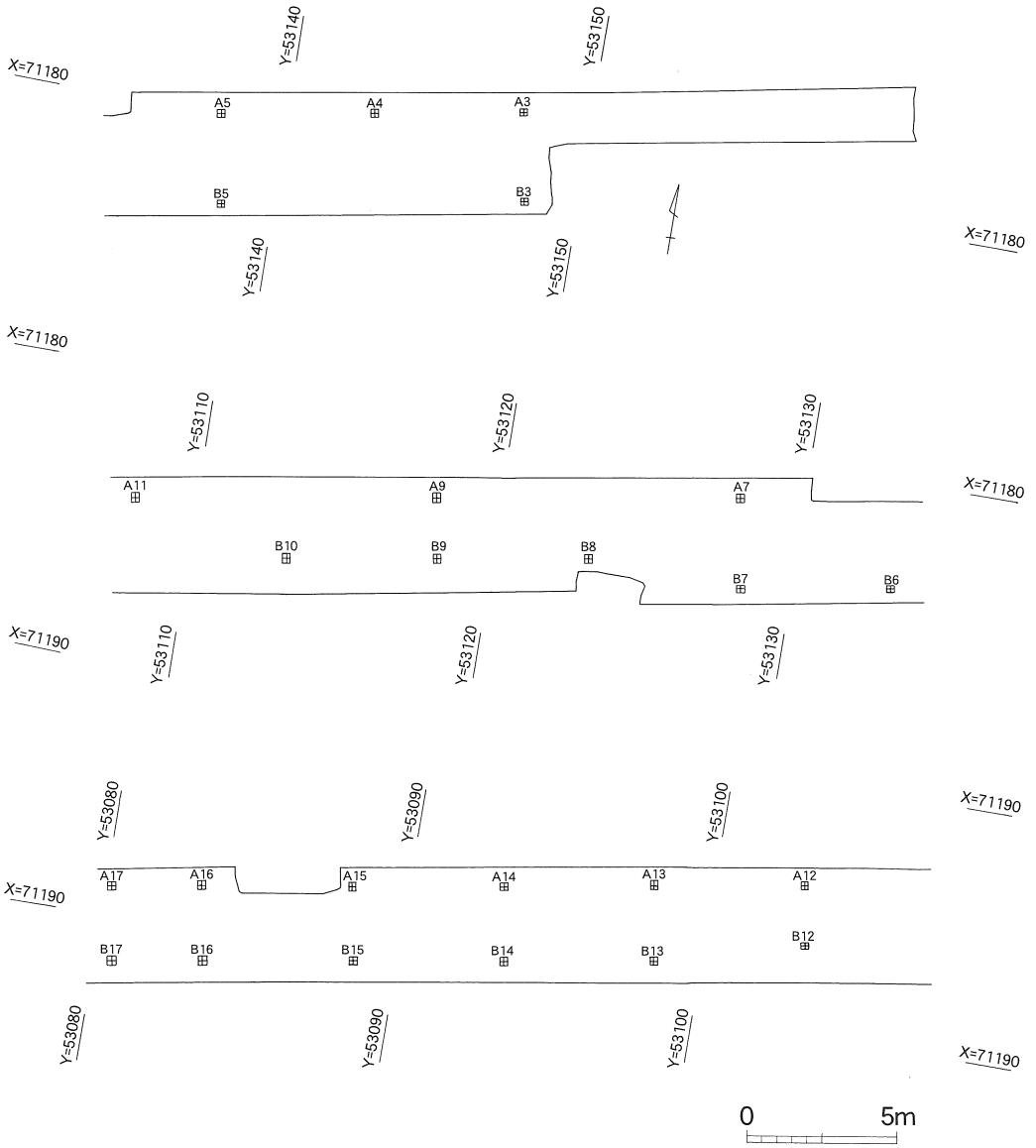
ＳＸ０１、ＳＸ０２については、後に報告する３区で検出できた畝状遺構と同レベルで検出できているうえ、遺構の形状をみると畝状遺構に類似するために同様の遺構であることが考えられる。

なお、文献によるとこの調査区には石見街道が南北に走っていたと考えられるが、調査においてはこの痕跡を認めることはできなかった。おそらくこれらは鉄道の敷設等、近代になってからの攪乱によって破壊され、残存していないものと考えられる。

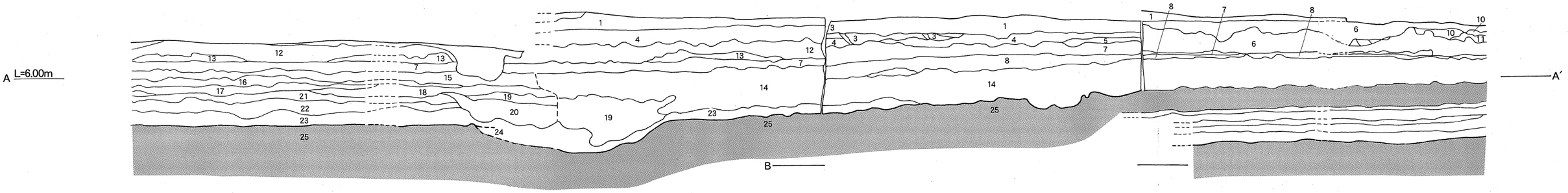
iii　2・3区

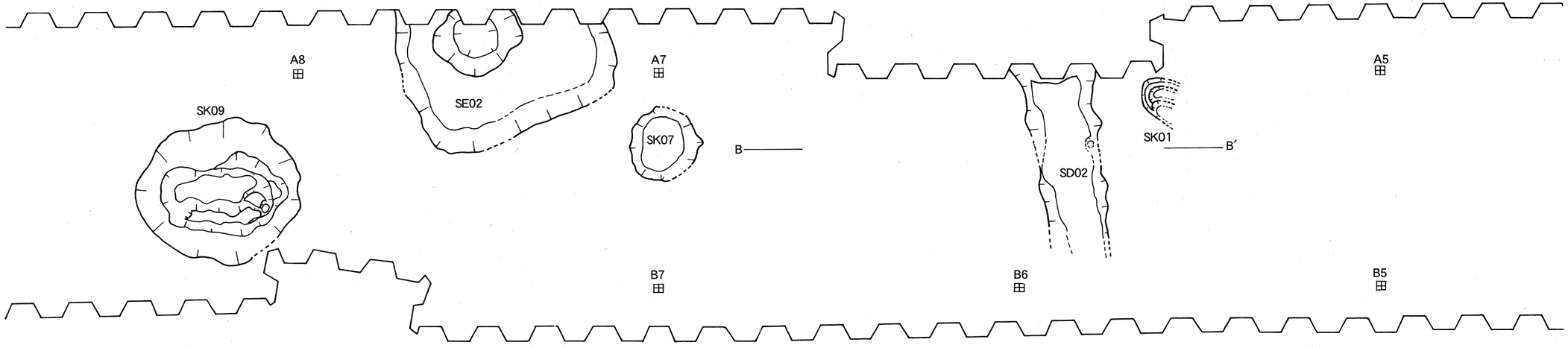
調査地を分断する用水路の西側に位置する調査区である。用水路のルートやＪＲ高架近接の都合から調査区は非常に変則的な形状をしている。２・３区は一連の調査区であるが、延長100mと長いことや排土置場の都合上、２区に分けて調査を実施した。

１区と同様、地表面から標高約6.5～6.6mまでは現代の攪乱を受けていた。なお、２・３区では３面の遺構面を確認しているが、第１遺構面は6.4～6.5m付近で検出できるために攪乱による削平が考えられる。また、２区で6.2m付近から堆積している黒褐色粘土は遺物包含層であり、弥生土器、須恵器、土師質土器、中・近世の陶磁器など多彩な時期の遺物を包含し、近世以降における削平、盛土等を想定できよう。その下層に堆積している黄灰色シルト層（25）をベースとして第３遺構面が認められた。

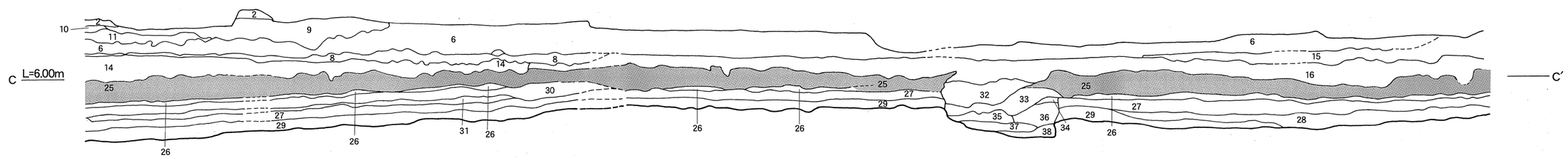


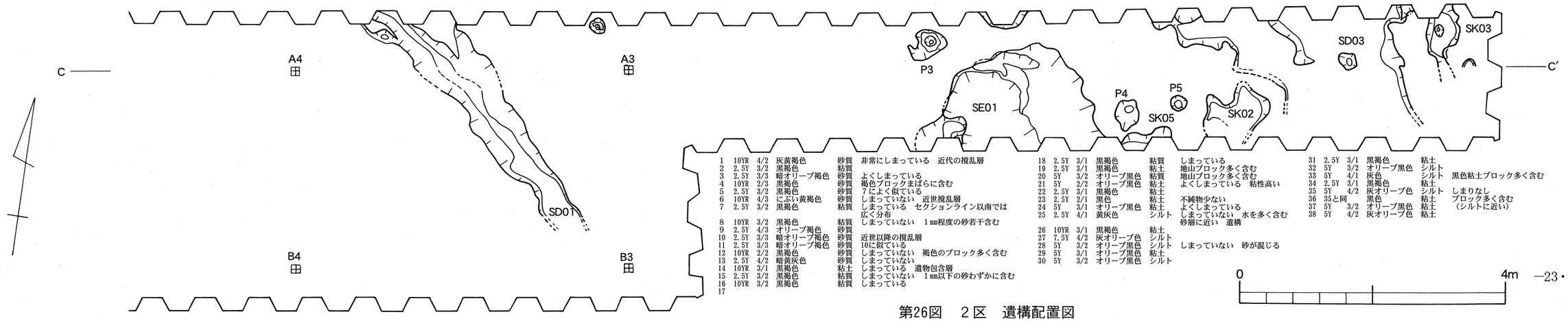
第25図　２・３区基準杭配置図





第４遺構面

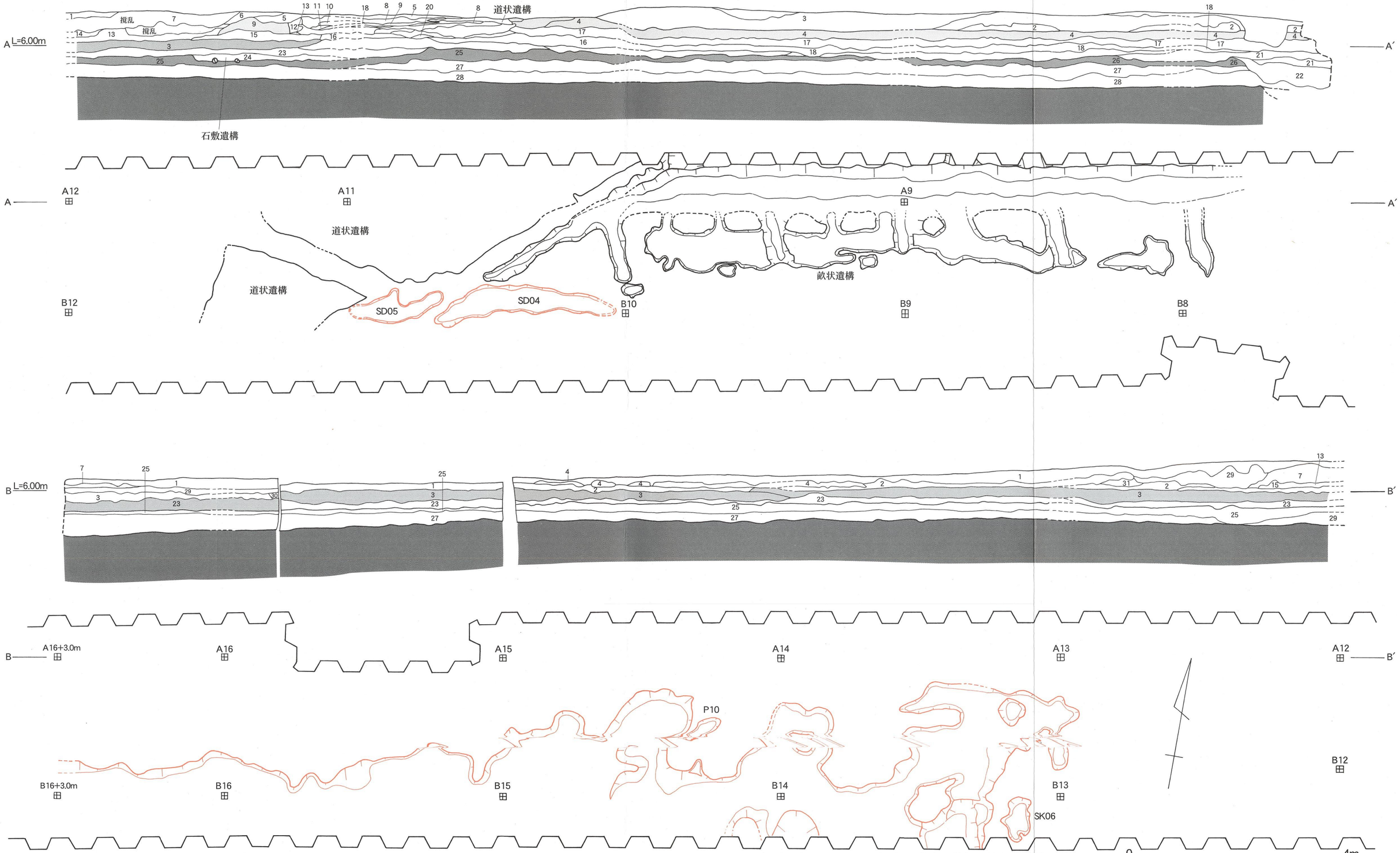




1	10YR	4/2	灰黄褐色	砂質	非常にしまっている　近代の撹乱層
2	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	
3	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	よくしまっている
4	10YR	2/3	黒褐色	砂質	褐色ブロックまばらに含む
5	2.5Y	3/2	黒褐色	砂質	７によく似ている
6	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	しまっていない　近世撹乱層
7	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	しまっている　セクションライン以南では広く分布
8	10YR	3/2	黒褐色	粘質	しまっていない　１mm程度の砂若干含む
9	2.5Y	4/3	オリーブ褐色	砂質	
10	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	近世以降の撹乱層
11	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	10に似ている
12	10YR	2/2	黒褐色	砂質	しまっていない　褐色のブロック多く含む
13	2.5Y	4/2	暗黄灰色	砂質	しまっていない
14	10YR	3/1	黒褐色	粘土	しまっている　遺物包含層
15	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	しまっていない　１mm以下の砂わずかに含む
16	10YR	3/2	黒褐色	粘質	しまっている
17					
18	2.5Y	3/1	黒褐色	粘質	しまっている
19	2.5Y	3/1	黒褐色	粘土	地山ブロック多く含む
20	5Y	3/2	オリーブ黒色	粘質	地山ブロック多く含む
21	5Y	2/2	オリーブ黒色	粘土	よくしまっている　粘性高い
22	2.5Y	3/1	黒褐色	粘土	
23	2.5Y	2/1	黒色	粘土	不純物少ない
24	5Y	3/1	オリーブ黒色	粘土	よくしまっている
25	2.5Y	4/1	黄灰色	シルト	しまっていない　水を多く含む　砂層に近い　遺構
26	10YR	3/1	黒褐色	粘土	
27	7.5Y	4/2	灰オリーブ色	シルト	
28	5Y	3/2	オリーブ黒色	シルト	しまっていない　砂が混じる
29	5Y	3/1	オリーブ黒色	粘土	
30	5Y	3/2	オリーブ黒色	シルト	
31	2.5Y	3/1	黒褐色	粘土	
32	5Y	3/2	オリーブ黒色	シルト	
33	5Y	4/1	灰色	シルト	黒色粘土ブロック多く含む
34	2.5Y	3/1	黒褐色	粘土	
35	5Y	4/2	灰オリーブ色	シルト	しまりなし
36	35と同		黒色	粘土	ブロック多く含む
37	5Y	3/2	オリーブ黒色	粘土	（シルトに近い）
38	5Y	4/2	灰オリーブ色	粘土	

0　4m

第26図　２区　遺構配置図



1	10YR 2/3	黒褐色	砂質		
	2.5Y 4/3	砂質ブロック多く含む（畝状遺構で埋土）			
2	2.5Y 4/2	暗黄灰色	砂質	しまりなし	
3	１と同じ	ただしブロックが少ない			
4	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質	しまりがある　粘質若干有り（畝状遺構ベース層）	
5	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質	しまっているが粗い	
6	10YR 4/2	灰黄褐色	粘質	粗砂含まない　７と同	
7	10YR 4/2	灰黄褐色	粘質	粗砂含む　撹乱層	
8	2.5Y 5/2	暗灰黄色	砂質	非常によくしまる	
9	10YR 3/1	黒褐色	砂質	非常によくしまっており堅い	
10	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質	しまりある　２㎜程度の砂含む	
11	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂質	しまりある	
12	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質		
13	2.5Y 4/2	暗灰黄色	粗砂	撹乱層	
14	2.5Y 3/2	黒褐色	粘質	撹乱層	
15	2.5Y 3/2	黒褐色	粘質	１㎜以下の砂やや含む	
16	2.5Y 4/2	暗灰色	粘質	しまっている	
17	2.5Y 3/2	黒褐色	粘質	しまりあまりなし　１㎜以下の砂わずかに含む	
18	10YR 3/2	黒褐色	粘質	しまりある　16と同	
19	2.5Y 3/2	黒褐色	粘土	粘性高い	
20	2.5Y 3/1	黒褐色	粘質	しまりある	
21	2.5Y 3/1	黒褐色	粘土	地山のブロックわずかに含む	
22	5Y 3/2	オリーブ黒色	粘質	地山のブロック多く含む	
23	5Y 3/2	オリーブ黒色	粘土	やや砂を含む　東側は石敷遺構の埋土となる	
24	2.5Y 3/2	黒褐色	粘土	19とよく似るが粘性は低い	
25	5Y 3/1	オリーブ黒色	粘土	マジリ物ほとんどなし　石敷遺構ベース	
26	5Y 2/2	オリーブ黒色	粘土	よくしまる　粘性高い	
27	2.5Y 3/1	黒褐色	粘土	28が変化したものと考えられる	
28	2.5Y 2/1	黒色	粘土	しまりあり　粘性高い　遺物包含層	
29	2.5Y 4/3	オリーブ褐色	粘質	撹乱層	
30	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質	撹乱層	

第27図　３区遺構配置図

＜第１遺構面＞

この面での遺構は３区のみに広がっており、２区では検出することができなかった。第７次調査[1]における畝状遺構・道状遺構の検出された遺構面と同一のものである。ただし、第７次調査に比べ、レベルは約30㎝程高くなっているが、これは遺構面が南に行くにつれ徐々に高くなっているものと考えられる。

この遺構面の時期であるが、今回の調査ではこの遺構面直下より丸釘や針金が絡んだ丸太が出土した。第７次調査の際においては遺物等の出土がほとんどなく、近世以降という表現がされていたが、このことから近代の可能性が強いと考えられる。また、当該地への鉄道の敷設が明治44年であることを考えると、それ以前であると考えられる。

なお、３区の中程から西端にかけて大きく攪乱されており、この部分については遺構を検出することができなかった。

【道状遺構】（第27図）

遺構形状・規模

西端及び南側が攪乱により失われているが、調査区を斜めに横切る状況で検出できた。幅3.5ｍを測る。周辺に比べて掘り込まれたり高くしたりするということはないために明確な境界が確認できないが、この部分だけ非常に堅備であり踏み固められたような印象を受ける。また、道状遺構は南側に行くにつれて狭くなっていく。この道は当時の主要道（石見街道）より分岐する支道であると考えられ、主要道から離れていくほど細くなっていくものであろう。

なお、今回検出した道状遺構で特筆すべきはこの堅備な層が一部分断されることである。しかし、この部分はこの遺構面のベースとなっている層であり、溝等が横切っていたというような形跡は認められない。これらが何であったということは明言できないが、何らかの理由で板材などが敷かれており直接踏み固められることがなかったために堅備にならなかったものとも考えられる。

【畝状遺構】（第27図）

遺構形状・規模

８Ｇｒから道状遺構東側にかけて認められた遺構である。攪乱のため道状遺構以西では検出することができなかった。遺構レベルは標高6.5ｍであるが、北側に行くほど徐々に低くなっていき、調査区北端では標高6.2ｍである。

形状としては東西にある２条の溝（南側については非常に浅い）に南北の溝（幅0.2ｍ）が連結するといった碁盤の目状を呈しており、第７次調査の畝状遺構の続きと考えられる。

遺構の性格

高畝が均等に並ぶことから、第７次調査時には畑地であると考えられている。しかし、今調査では畝の端と思われる場所しか検出することができず、畑地であるとする明確な証拠を確認することができなかった。

【第１遺構面下～第２遺構面上の出土遺物】（第28図）

１は弥生土器　広口壺　頸部の可能性がある。しっかりとした断面が半円形を呈する５条の沈線を持ち、その下部に縦方向のハケ目が施されるが、その上より「ノ」字状に強いハケ目を更に施している。

２～５は土師器　皿　である。いずれも底部のみの残存であり、底部は糸切りされている。そのプロポーションから13～14世紀のものと考えられる。

６は須恵器　坏身　である。小片である上、口縁端部が欠損しているが古墳時代後期後半（出雲５～６期）[2] と考えられる。

７は陶器　擂鉢　口縁部である。口縁端部は折り曲げて肥厚させる。

８は陶器　焙烙　である。口縁端部は肥厚し、径に比べ深い立ち上がりを持っている。

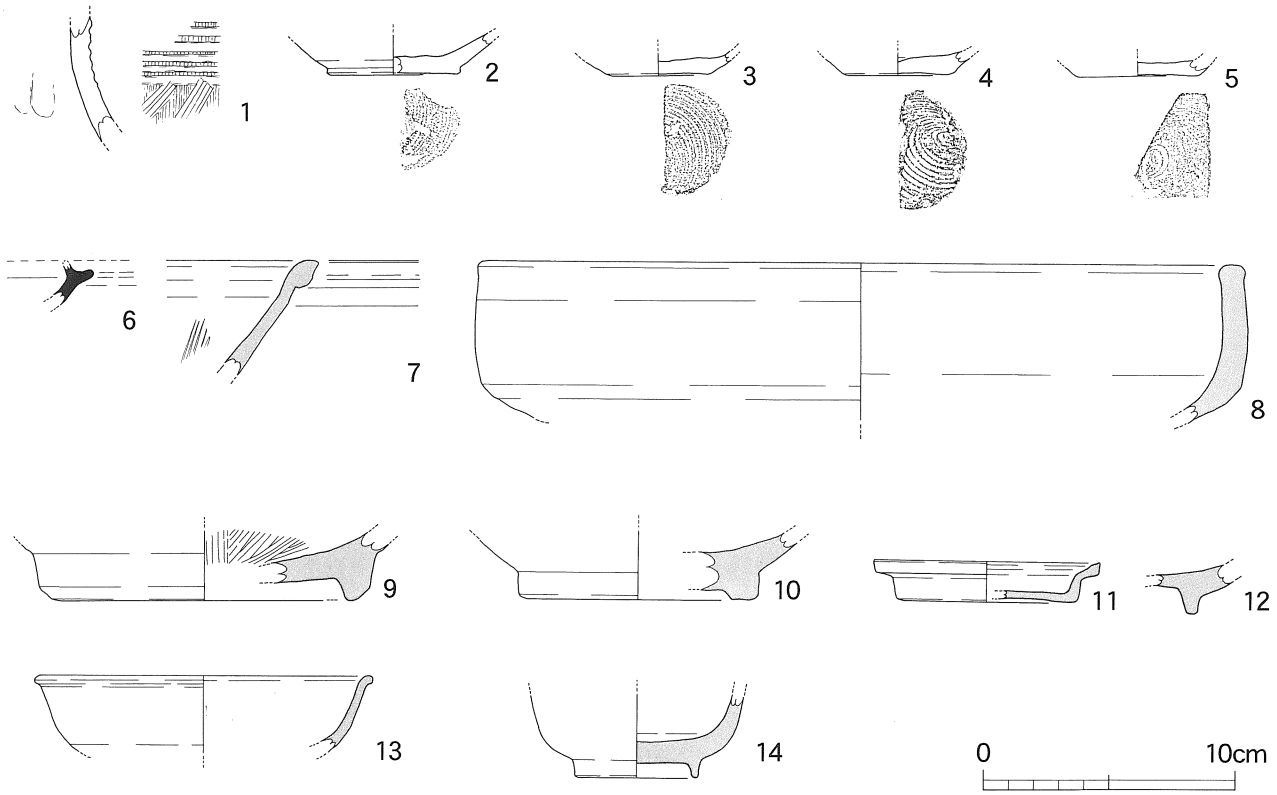
９は陶器　擂鉢　底部である。比較的太い擂目が認められる。

10は肥前系陶器　鉢　高台部である。底部は厚いものの、体部の器壁は徐々に薄くなっていっている。17世紀のものと考えられる。

11は陶器　皿　の可能性がある。底部より垂直に立ち上がり、口縁部で水平になる。口縁端部は肥厚している。

12は陶器　碗　高台部である。緑色の釉薬が施されている。

13は磁器　碗　である。器肌はきれいな白色であるが、国産のものと考えられる。内部は格子文が施されている。



第28図　第１～第２遺構面出土遺物

14は伊万里焼　碗　である。しっかりとした器壁であり、体部及び高台部に１条の藍色の染付が施されている。近世のものと考えられる。

８・９・11～14は近世から近代のものと考えられる。

＜第２遺構面＞

３層上面において検出した遺構面である。調査区の東側に溝状と推定される遺構が確認できた。これらが第１遺構面において攪乱を受けていた場所でしか認められないことや、その遺構形状から第１遺構面の畝状遺構が攪乱を受けてその下部が残存していることが考えられるが、遺構底面が第１遺構面の遺構底面よりも10cm程度低いことから畝状遺構よりも先行して形成された可能性も残されている。

【出土遺物】（第29図）

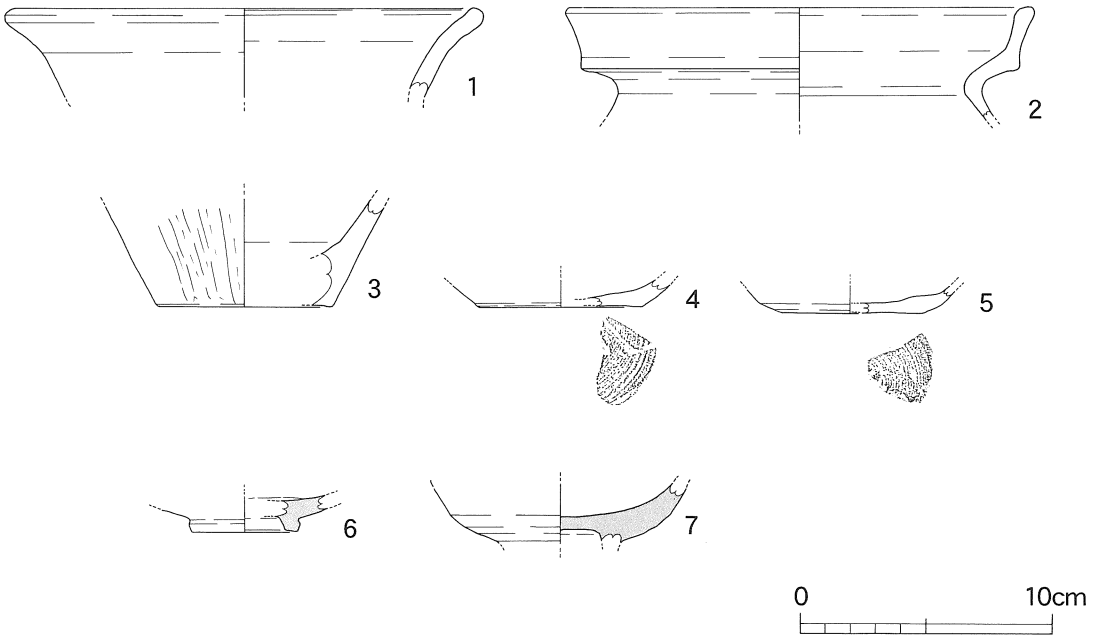
１は土師器　甕　口縁部と考えられる。しかし、脚部である可能性もある。

２は弥生土器　甕　である。口縁端部が肥厚し、拡張部外面に凹線の痕跡が認められる。時期は弥生時代後期（草田１期）[3] であると考えられる。

３は弥生土器　底部である。外面はヘラミガキされ、しっかりとした平底である。内面には炭化物の付着が見られた。

４・５は土師器　皿　または　坏　である。どちらも底部は糸切りである。13～14世紀のものであろう。

６・７は陶器　碗　である。６は内面の一部を７は内外面を施釉している。近世から近代のものと考えられる。



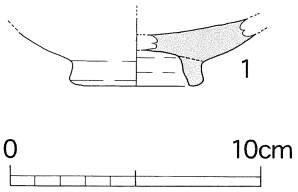
第29図　第２遺構面出土遺物

【土壙】

ＳＫ０６（第27図）

遺構形状・規模

南北0.8m、東西0.5mのいびつな形状をした土壙である。深さは15cm程度であり、緩やかな傾斜で底に至っている。第２遺構面畝状遺構のすぐそばに位置しており、これの一部である可能性も考えられる。



第30図　ＳＫ０６出土遺物

出土遺物（第30図）

１は陶器　碗　である。内外面とも施釉されており、体部には１条の線が染め付けられている。18世紀以降のものと考えられる。

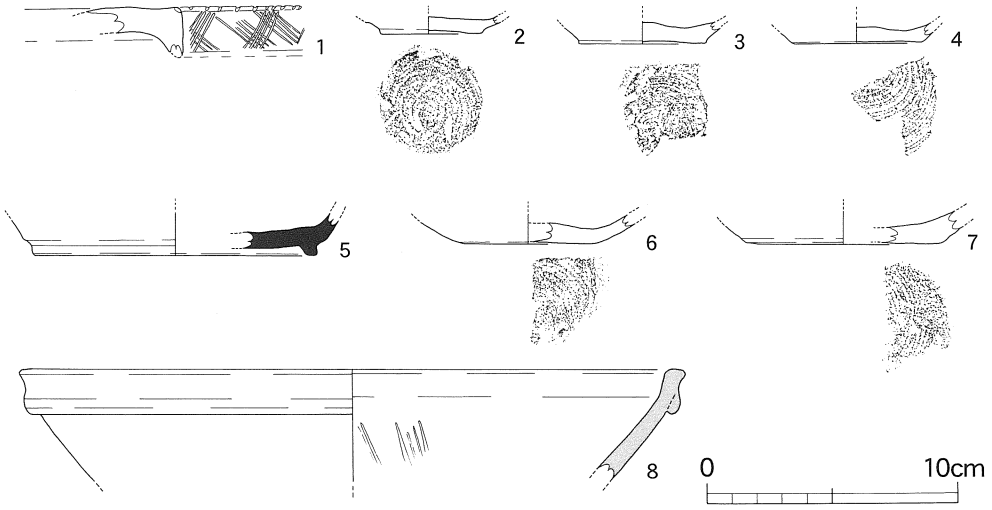
【第２遺構面下～第３遺構面上の出土遺物】（第31図）

１は弥生土器　広口壺　口縁部である。端部拡張上部には刻目、拡張部には１単位４条の斜格子を施している。弥生時代中期中葉（松本Ⅲ－１）[4] のものである。

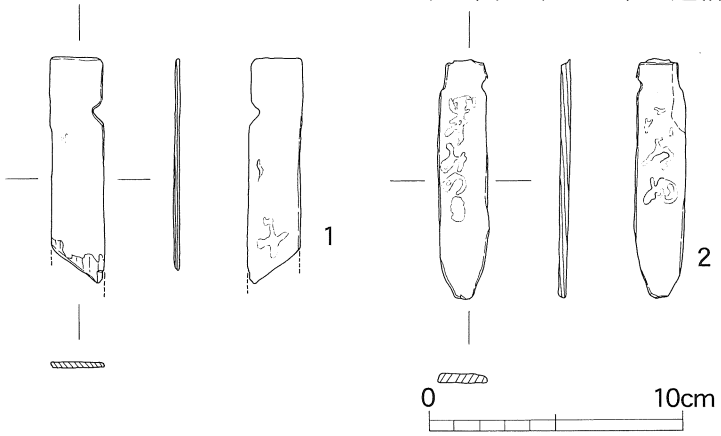
２～４・６・７は土師器　皿　である。いずれも底部は糸切り痕を良く残している。底部のみの出土であるため詳細については不明である。

５は須恵器　高台付坏　である。底部はナデ調整が施されている。

８は肥前系陶器　擂鉢　口縁部である。17世紀代のものと考えられる。



第31図　第２～第３遺構面出土遺物



第32図　墨書木札実測図

墨書木札（第32図）[5]

１は上部片側に切れ込みが設けられており、下部は欠損する。墨書の痕跡が認められたが、何が書かれているのかは不明である。

２は上部は両端に切れ込みが設けられており、下部は細くなっている。墨書が認められ、表面には「□□□物」裏面には「四升みの」と書かれている。

＜第３遺構面＞

この面での遺構は第１遺構面と同様に、３区のみで検出した遺構である。第７次調査における石敷遺構の検出された遺構面と同一のものである。

【石敷遺構】（第33図）

遺構形状・規模

最大幅2.6m、最小幅1.9m、深さ５cmの浅い溝の中央部分に２～５cmの川石を敷き詰めて道状にした遺構であり、北東から南西へ向かって延びている。

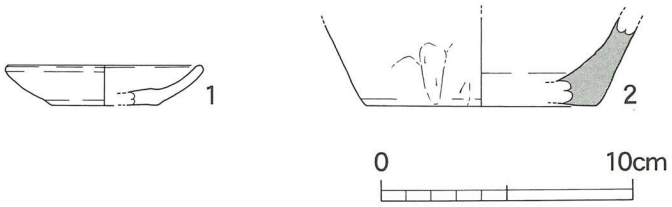
第７次・第10次調査時にも同様の遺構が確認されており、これらから継続するものである。ただし、先の調査ではフラットな面に石を敷き詰めた状況で検出されているため、溝の中に敷き詰めた今回の状況とは異なっている。

第33図　石敷遺構実測図

出土遺物（第34図）

１は土師器　皿　である。底部は糸切りであり、そのプロポーションから13世紀のものと考えられる。

２は陶器　底部である。外面は丁寧にヘラケズリが施されているが器種については不明である。



第34図　石敷遺構出土遺物

遺構の性格

この遺構は旧石州街道方面より西南方向に延びており、なおかつ第１遺構面で検出した道状遺構の直下に同様の方向で位置していることから、道状遺構の前段階に道として使用されていたと考えられる。この遺構のベースとなる層はオリーブ黒色粘土（25）であり、遺構が形成された時期にはこの周辺は湿地帯であったと考えられる。そのために小石を敷き詰めて歩きやすくしたものであろう。

【第３遺構面下～第４遺構面上の出土遺物】

第３遺構面から第４遺構面にかけても若干の遺物の出土が見られた。２区ではオリーブ黒色粘土層（25）黒色粘土層（28）の２層に分かれていたが、３区では黒色粘土層のみ認められた。

２区　オリーブ黒色粘土層出土遺物（第35図）

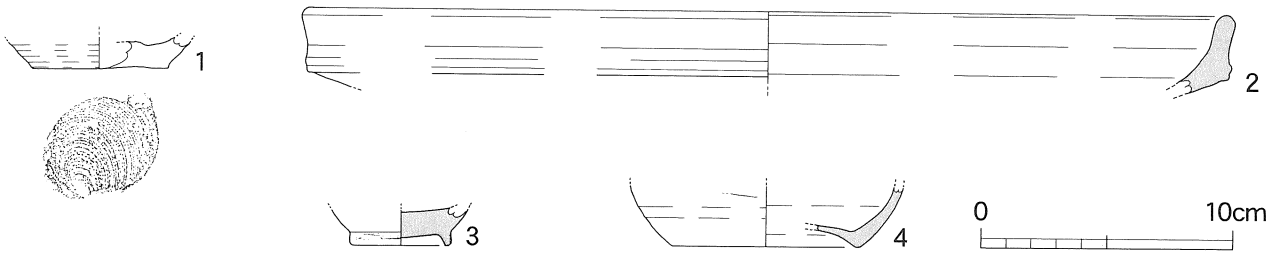
１は土師器　皿　である。底部は糸切りで非常に厚く、内面は粗い整形である。13世紀に属するのであろうか。

２は陶器　焙烙　である。

３は陶器　碗　である。内外面とも化粧土が塗られており、高台部外面には２条の焦げ茶色の線が施される。

４は陶器　土瓶　である。外面の上部には施釉部分が残る。

３・４については18世紀以降のものと考えられる。



第35図　２区オリーブ黒色粘土層出土遺物

２区　黒色粘土層出土遺物（第36図）

１は弥生土器　壺　である。口縁部のみであるが端部は肥厚し、外反する。弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）[4] に属するものと考えられる。

２は弥生土器　甕　である。口縁拡張部は内傾し、外面を貝殻で整形している。古い要素を持つが古墳時代後期後半（草田４～５期）[3] に当たるものと考えられる。

３は弥生土器　甕　である。２と同様の形態をしており、時期的にも同じであると考えられる。

４は土師器　擂鉢　である。内面に擂目が認められるが、非常に軟質な胎土である。

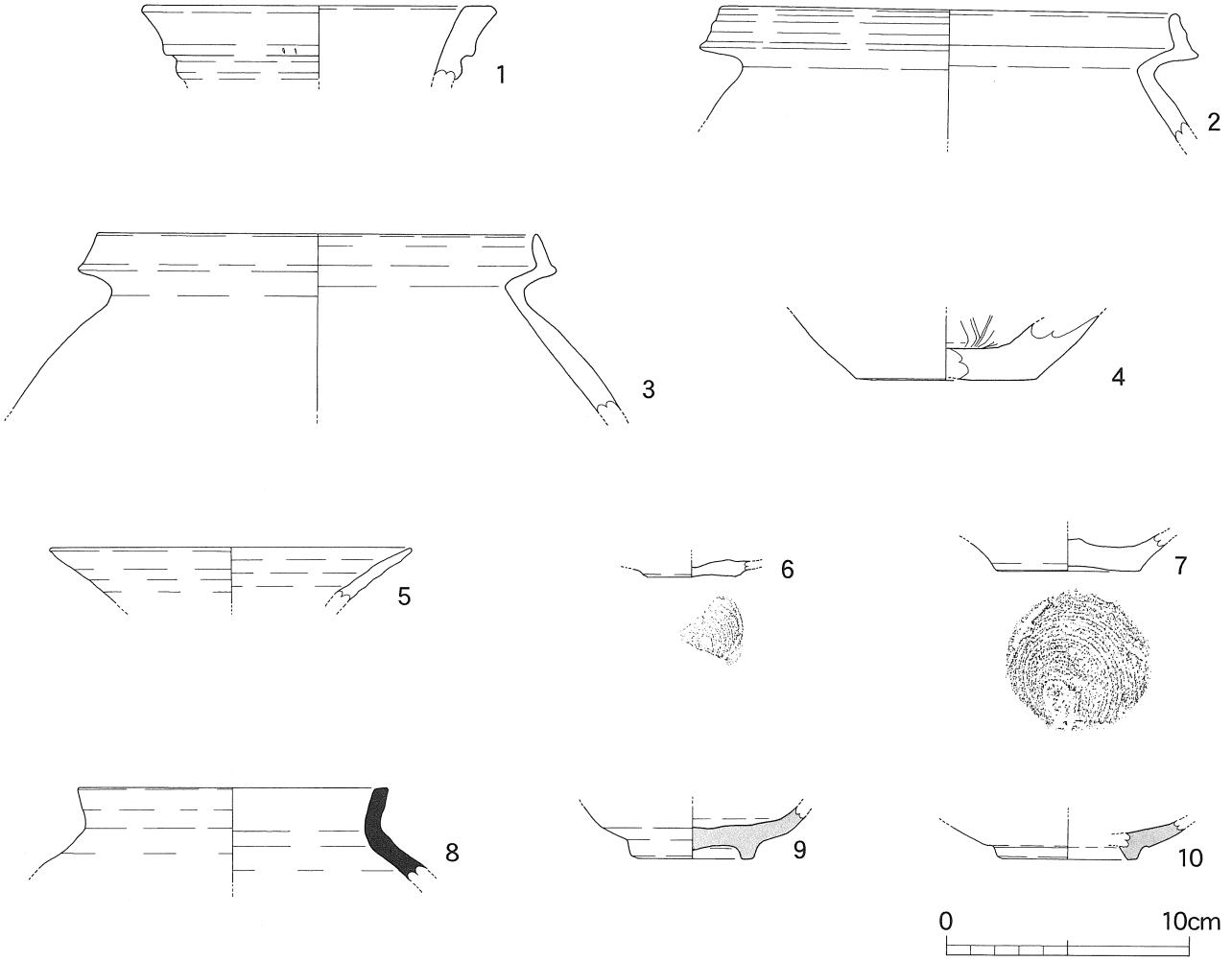
５は土師器　坏　である。器高は低く、外反するものと考えられ、15世紀代のものであると考えられる。

６・７は土師器　坏　または　皿　である。いずれも底部は糸切りである。

８は須恵器　壺　である。

９は肥前系陶器　碗　である。内面は施釉され、見込みには砂目が認められる。17世紀初頭のものであろう。

10は陶器　碗　である。底部の調整が粗く、内面と外面上部に施釉が施されている。18世紀以降のものであろう。



第36図　２区黒色粘土層出土遺物

３区　黒色粘土層出土遺物（第37図）

１・２は土師器　坏　または　皿　である。いずれも底部は糸切りである。

３・４は土師器　坏　である。いずれも底部は糸切りであり、器壁が若干内湾しながら立ち上がっていく。どちらも15世紀のものと考えられる。

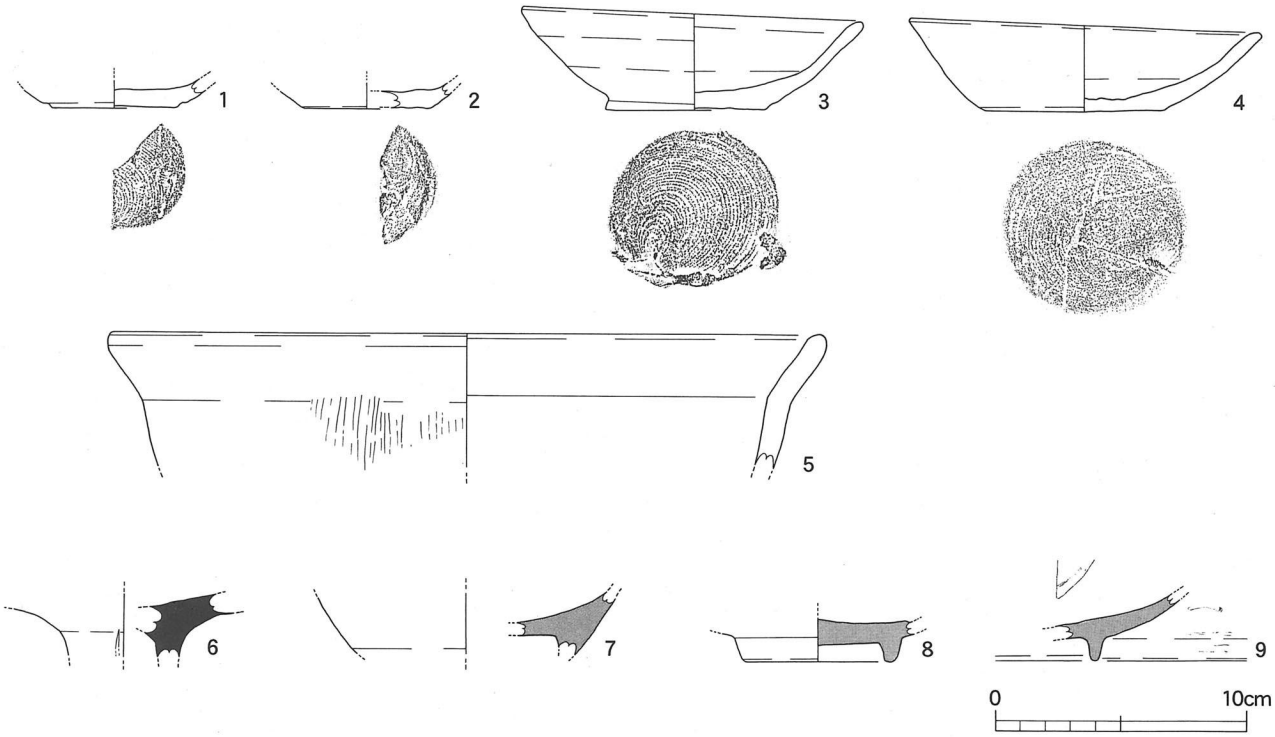
５は土師器　鉢　の可能性があるものである。外面には粗いハケ目、内面はヘラケズリ後にナデが施されているが、詳細については不明である。

６は須恵器　高坏　である。脚・坏部の境目には切込状の透孔が認められる。

７は陶器　碗　である。外面は施釉するが内面には施していない。

８は白磁　碗　である。中国製のものと考えられ、11世紀後半～12世紀頃の年代が与えられるもある。

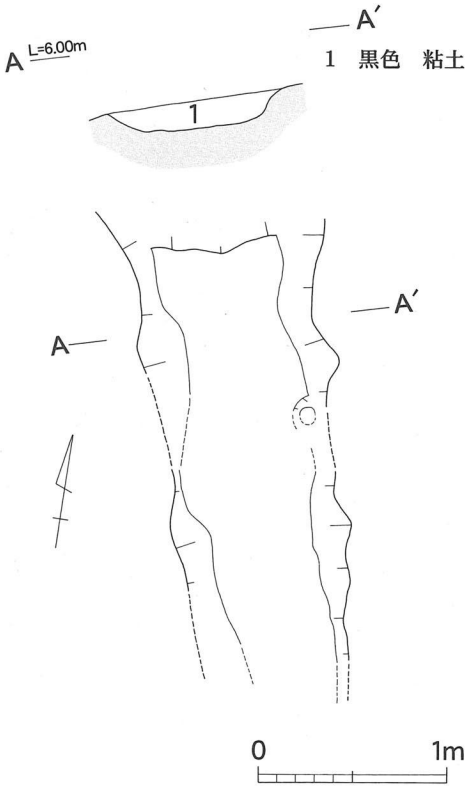
９は磁器　碗　と考えられる。内外面に藍色の染付が認められるが、何をモチーフにしているかまでは不明である。



第37図　３区黒色粘土層出土遺物

＜第４遺構面＞

アクセス道部分及び１区の第２遺構面に該当する遺構面である。標高5.3m～６mの黄灰色シルト層をベースとする遺構であり、溝状遺構、ピットを確認した。なお、この遺構面は地表よりも約２m以上低く、安全上、第７次調査[1]及び第10次調査[6]においてはこの面までの調査は実施されていない。



第38図　ＳＤ０２遺構実測図

【溝状遺構】

ＳＤ０１（第41図）

遺構形状・規模

幅0.3～0.4mの南東から北西へ向かって延びる深さ10cmの浅い溝状遺構である。南東部分については遺構断面形が整った舟底形を呈するのに対し、北西部分については非常にルーズとなっている。遺物の出土はなく、詳細は不明である。

ＳＤ０２（第38図）

遺構形状・規模

幅0.9mの溝状遺構である。調査区が狭まった場所に位置しており、詳細については不明である。遺物も認められない。

ＳＤ０３（第40図）

遺構形状・規模

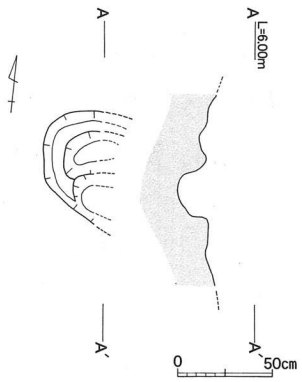
調査区東端で検出した幅1.1ｍの浅い溝状遺構である。南北に走る溝であるが、調査区が非常に狭いために明確ではないものの、北側でほぼ直角に西へと延びるようである。出土遺物がなく、時期は不明である。

【土壙】

ＳＫ０１（第39図）

遺構形状・規模

径0.6ｍの土壙である。東半分は幅30㎝のサブトレンチで不明であるが、サブトレンチ以東では遺構を検出してないため、ほぼ円形を呈すると考えられる。遺物の出土はみられなかった。

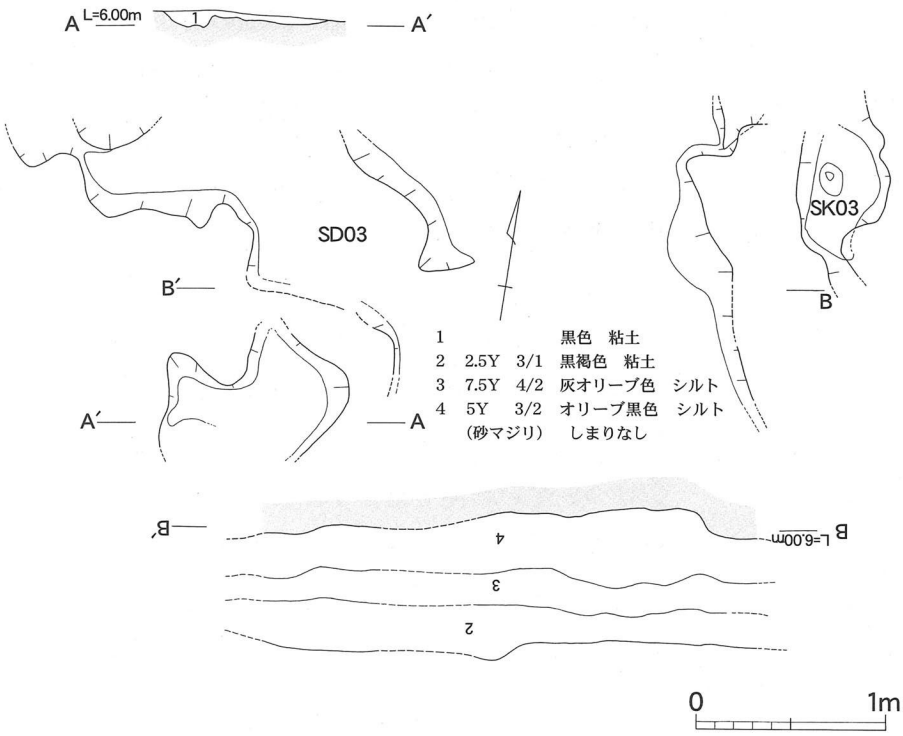


第39図　ＳＫ０１遺構実測図

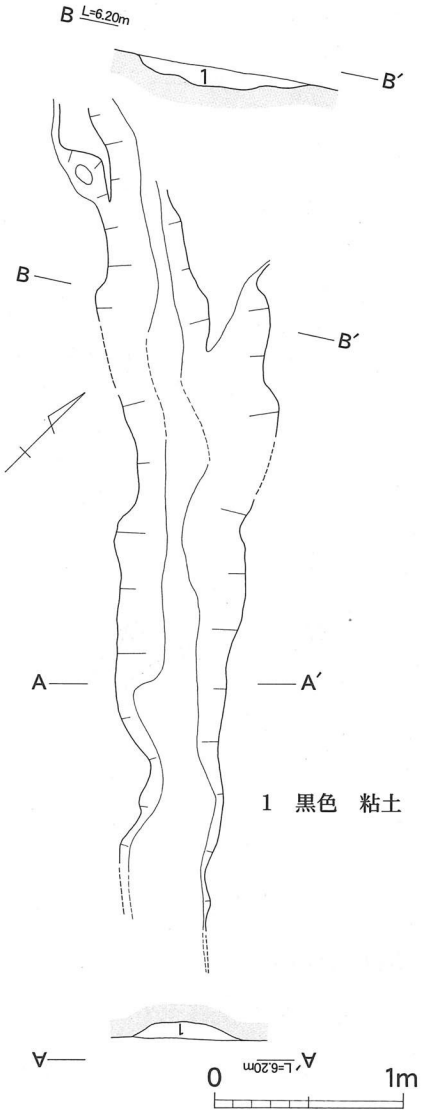
ＳＫ０２（第40図）

遺構形状・規模

不整形な非常に浅い土壙である。遺物の出土も認められず、時期も性格も不明である。



第40図　ＳＤ０３・ＳＫ０２・ＳＫ０３遺構実測図



第41図　ＳＤ０１遺構実測図

ＳＫ０３（第40図）

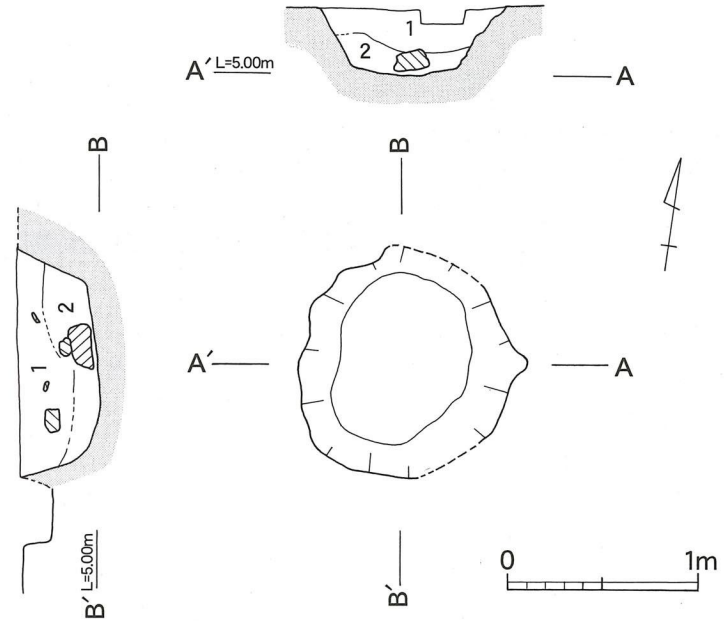
遺構形状・規模

短幅0.5mを測る、楕円形の土壙である。遺構内に小さなピットが認められており、細い柱もしくは杭を立てていた可能性も考えられる。

ＳＫ０７（第42図）

遺構形状・規模

径1.0m、深さは約0.3mの平面円形、断面逆台形を呈した土壙である。



1　2.5Y　2/1　黒色　粘土　しまっていない　不純物は含まない
2　2.5Y　3/1　黒褐色　粘質　しまっていない　細かい砂わずかに含む

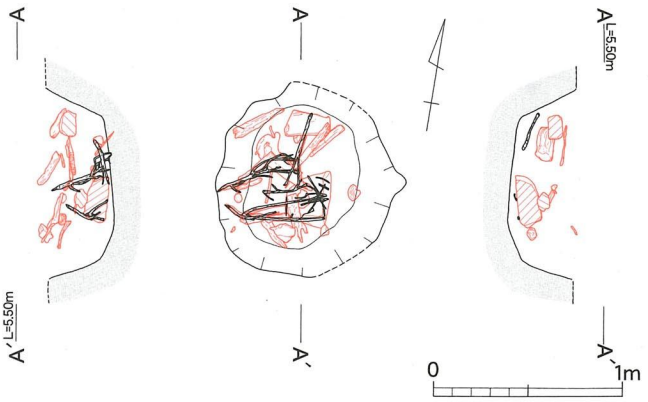
第42図　ＳＫ０７遺構実測図

土層堆積状況（第42図）

遺構内の土層は２層で構成され、その状況より自然に堆積したと考えられる。上層では木片が、下層では馬の顎骨が出土した。遺構中位に堆積している黒色粘土には有機物が混入している。

遺物出土状況（第43図）

遺構内上位には焼かれた形跡のある木片がバラバラと規則性なく出土した。遺構底には木の枝が敷かれ、その上には台形をした30cm×25cmの石が乗せられている。更に石の上には藁の朽ちたものと考えられる有機物が一面にあり、その上には馬の右顎骨が乗っていた。



第43図　ＳＫ０７遺物出土状況

出土遺物

獣骨

この獣骨は馬の右顎骨と考えられるが、慎重を期したにも関わらずその脆さゆえに正常な状態で取り上げることができなかった上、骨の周辺についていた泥を落とす際にもその風化は一段と進み、復元不可能となってしまった。そのため、実測図を掲載できなかったことをお詫びしたい。

遺構の性格

この遺構の性格としては、ゴミ捨て場あるいは馬を使用した祭祀場の可能性が考えられるが、それを裏付けるような関連遺構は検出できていないために詳細は不明である。

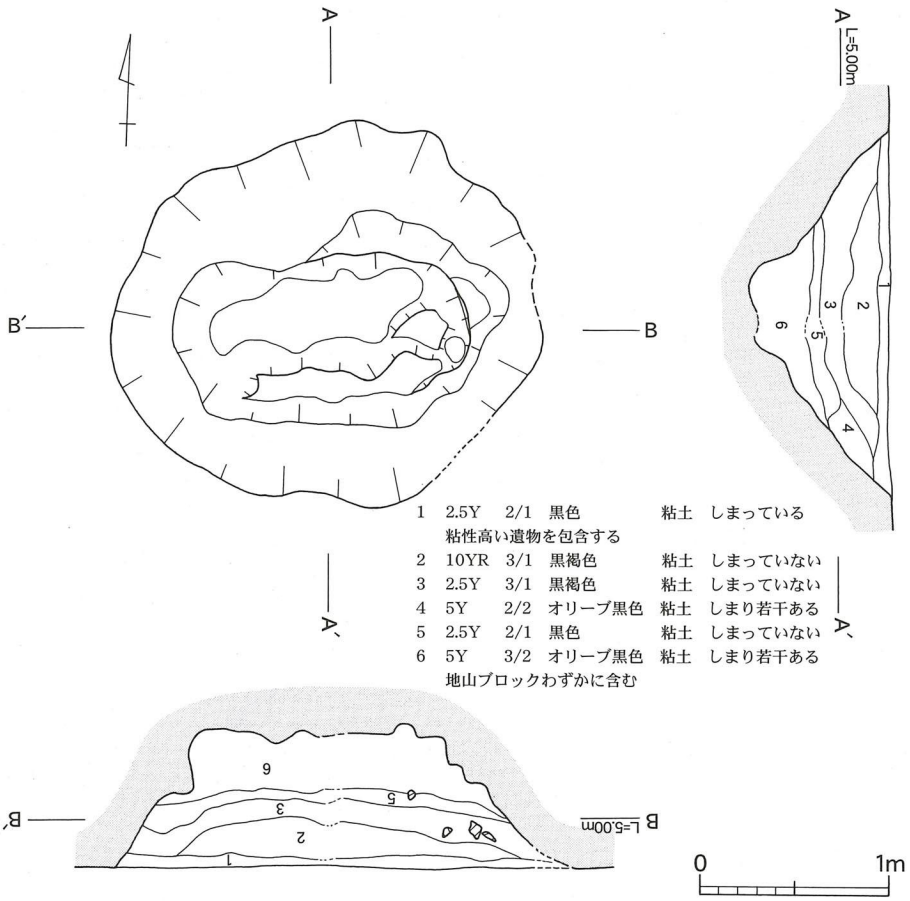
ＳＫ０９（第44図）

遺構形状・規模

長径2.3m、短径1.9m、深さ0.7mの楕円形を呈するしっかりとした土壙である。この遺構は２段掘となっており、２段目は1.6m×0.6mの隅丸方形となる。

土層堆積状況（第44図）

シルト層をベースとした遺構内に粘土が埋土として堆積している。最下層は２段目の掘り込みに厚く全面に堆積しているが、その層よりも上層では比較的堆積量が少ない。



第44図　ＳＫ０９遺構実測図

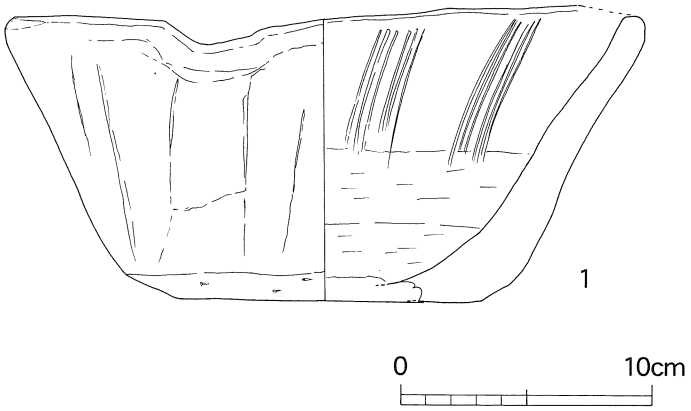
遺物出土状況（第45図）

遺構内からは中世（14～15世紀？）と考えられる擂鉢の出土がみられた。出土した層は６層である。また、遺構内の埋土からは骨片の出土がみられたが、非常に細片であるために人骨であるのか獣骨であるのか不明である。

遺構の性格

この遺構の上部では楕円形であるが、下部では幅0.6m、長さ1.6mの長方形を呈しているため、その規模からみてこの遺構は土壙墓または木棺墓として使用された可能性も考えられる。しかし、出土した擂鉢がすでに摩耗のため使用できない状態であるため、これを副葬品と考えるには若干疑問が生じよう。

第45図　ＳＫ０９遺物出土状況



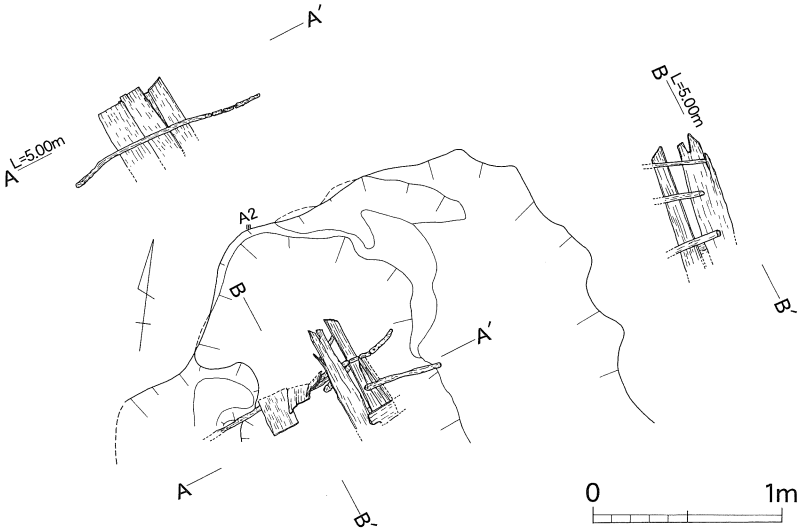
第46図　ＳＫ０９出土遺物

出土遺物（第46図）

擂鉢

１は口径24.7㎝、高さ11.9㎝を測る在地の擂鉢である[7]。内面には６条１単位の擂目を下から上に向け９方向施されているが、その下方については内面の摩耗によりなくなってしまっている。この擂鉢は底に穴が開いてしまうほど非常によく使い込まれた様子がうかがえる。

土器の１方向に注口がつくられている。



第47図　ＳＥ０１遺構実測図

【井戸】

ＳＥ０１（第47図）

遺構形状・規模

検出幅1.8m、深さ0.7mの不整形な土壙である。南側は調査区外に延びているために規模は明確ではないが、推定３m四方の方形を呈すると考えられる。井戸部分については更に深く掘り込まれており、非常に深くなっている。

土層堆積状況

上層には遺構面のベース層のブロックを含んだ黒色粘土、下層には不純物のない黒色粘土の堆積がみられた。この黒色粘土は遺構面上の黒色粘土と同様のものであり、人為的に埋めたのではなく、自然に埋まった可能性が高い。

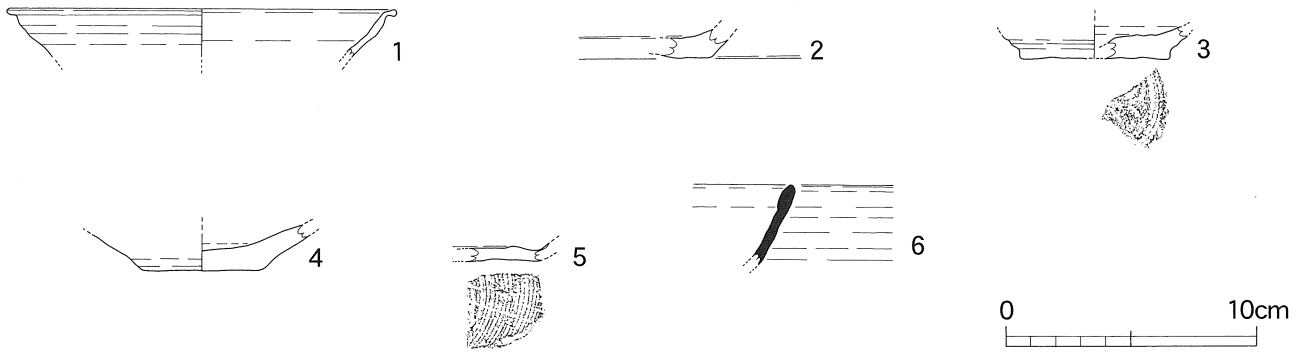
出土遺物（第48図）

遺構内より土師器・須恵器が出土した。

１は土師器　坏　口縁部である。非常に薄いつくりで端部を外方に折り曲げている。

２～５は土師器　坏　または　皿　である。３・５は底部が糸切りであるが、４はあまりはっきりとしていない。時期としては13世紀～14世紀のものと考えられる。

６は須恵器　坏　である。小片のため詳細は不明である。



第48図　ＳＥ０１出土遺物

遺構の性格

遺構の底には矢板に切られた形で木枠を検出した。この木枠は厚さ５㎜程度の板を木杭で止めて作られる簡単な構造である。内部からは湧水がひどく、井戸である可能性が高い。また、土層堆積状況よりみるとＳＥ０１の掘方が袋状を呈しているために、ＳＥ０１とＳＸ０１は別の遺構という可能性も考えられる。時期としては、出土遺物より中世期であると考えられる。

また、遺構埋土が遺構面上層と同じであることから、井戸を廃棄する際に上部の井戸枠を撤去した後に、埋め戻すことなく自然に埋まったものと推定できる。

なお、検出面は地表より３ｍ程下がっており、調査区の幅の狭さ、打ち込んである矢板の長さから考えると、これ以上掘ることは困難と危険が伴うため、井戸枠から約20㎝下を検出したところで調査を断念した。

ＳＥ０２（第50図）

遺構形状・規模

東西辺2.9ｍの長方形または正方形を呈する土壙である。深さ0.5ｍを測るが、西に偏った場所には径0.6ｍの円形で部分的に深くなっている掘込みが確認できた。なお、湧水量が非常に多く、この遺構については完掘することができなかった。

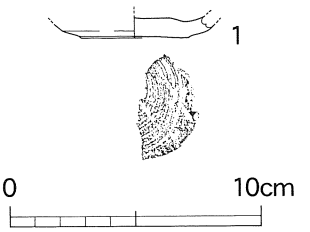
土層堆積状況

特に掘り返しの跡などもないために人為的な堆積とは考えにくく、自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物（第48図）

土師器が１点出土した。

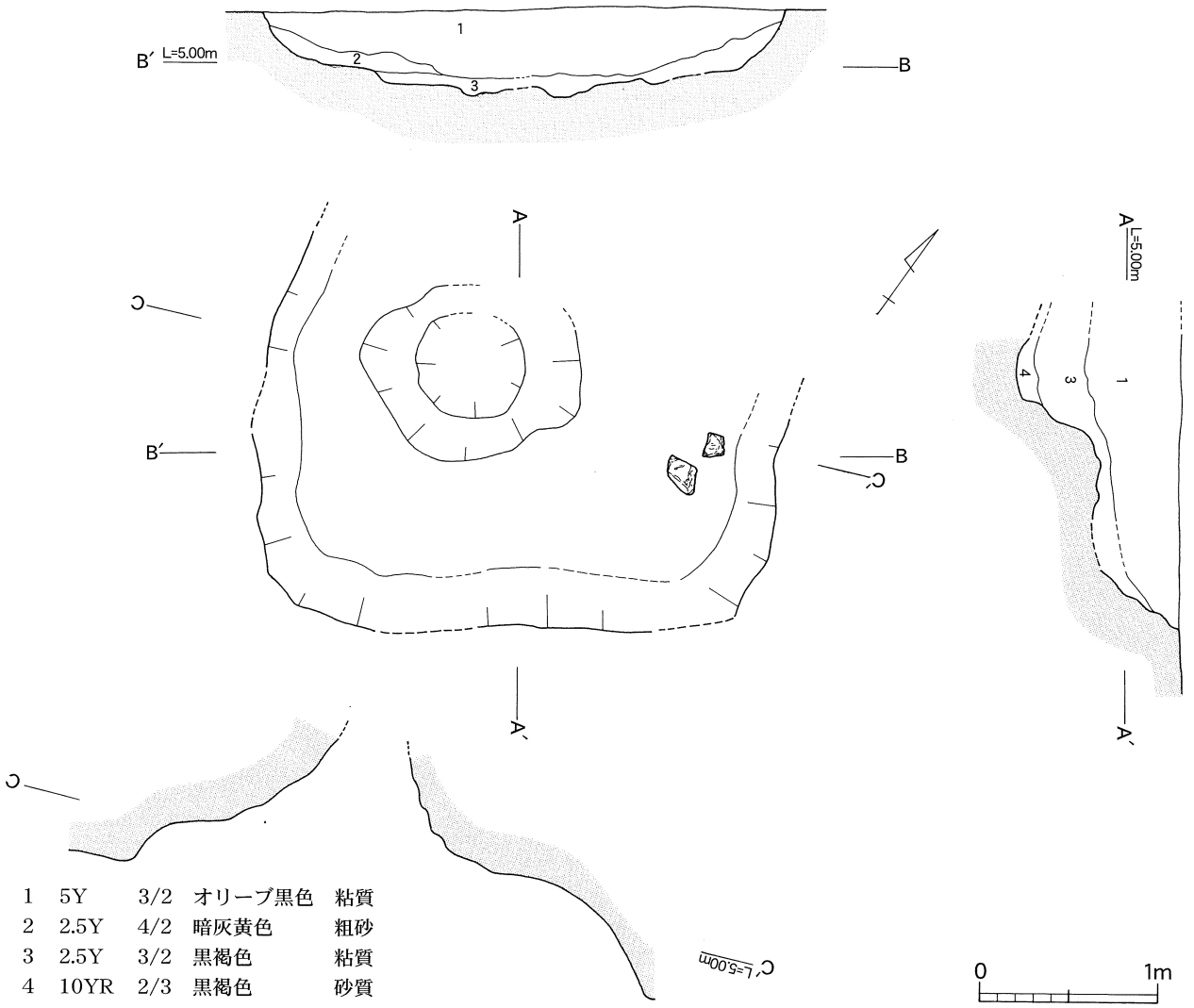
１は土師器　皿　または　坏　と考えられる底部である。底部は糸切りの痕跡をよく残している。13世紀のものと考えられる。



第49図　ＳＥ０２出土遺物

遺構の性格

円形に掘り込まれている場所の底からは豊富に湧水がみられ、素掘りの井戸として利用された可能性が考えられる。なお、時期や遺構の性格を決定づけるような遺物の出土はみられなかった。



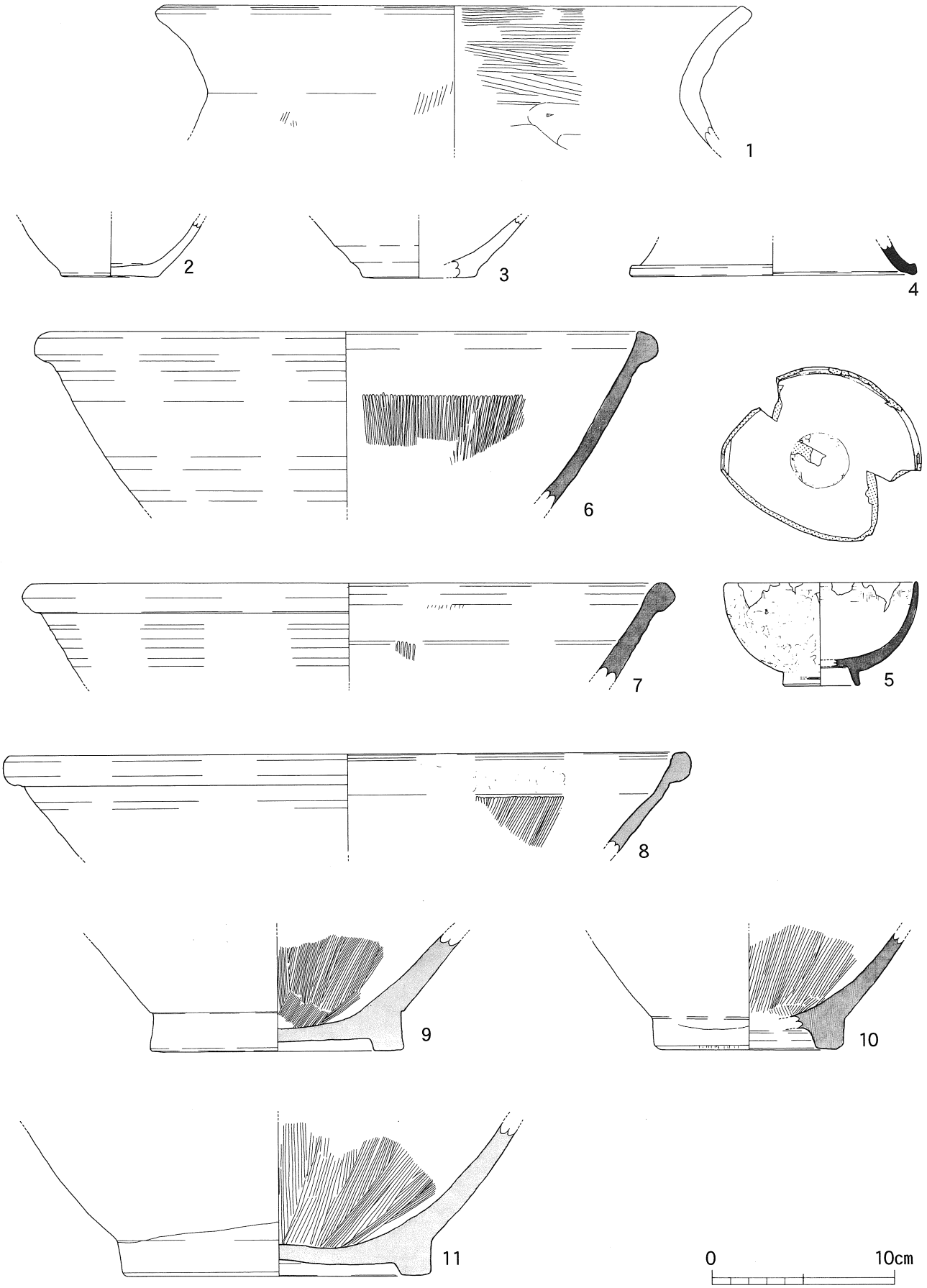
第50図　ＳＥ０２遺構実測図

この遺構面は７グリッドから16グリッドまで標高5.4～5.5mのレベルでほぼ水平を保っているものの、８グリッド以西に遺構を認めることができなかった。

＜遺構面以下＞

第３遺構面の下層は黄灰色シルト層と黒色粘土が交互に堆積しており、その後砂層に至る。砂層は第３遺構面と同様に西へ向かうにつれ下方へと傾斜し湧水が激しい。これまでの調査の成果[8]より、この調査区の西側には弥生時代中期以前と考えられる幅67mにも至る自然河道が存在しており、その影響で徐々に傾斜していると考えられる。これらの層からは遺物の出土がなく、人々の生活の痕跡はうかがうことはできない。

なお、３区以西の砂層のレベルを追うには、打ち込んである矢板の長さを考慮すると安全が保たれないためにやむを得ず確認を断念している。



第51図　２区遺構外出土遺物

２区遺構外出土遺物（第51図）

１は土師器　甕　である。口縁部内外面及び頸・肩部外面はハケ目が施されており、頸部以下の内面はヘラケズリである。非常に粗雑な印象を受ける。

２・３は土師器　碗　底部である。いずれも風化が著しくはっきりとはしないが、底部に糸切りの痕跡を残している。また、３の外面には丹彩の痕跡も認められている。

４は須恵器　高坏　脚部である。低脚高坏と考えられるが、小片のためはっきりとはしない。古墳時代後期のものであろう。

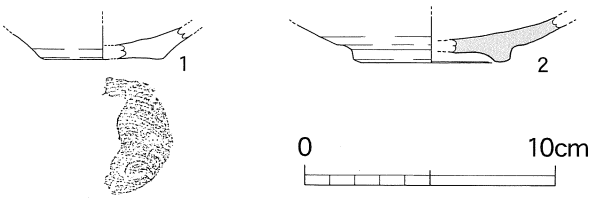
５は磁器　碗　である。非常に多くの文様を配した染付が施される。

７～11は陶器　擂鉢　である。内外面に赤褐色の上薬が施されており、擂目は非常に細かい。石見焼やそれに近いものであると考えられる。

３区遺構外出土遺物（第52図）

１は土師器　皿　底部である。底部は糸切り痕が残存している。

２は肥前系陶器　皿　である。削出高台を持ち内外面に灰釉が施されている。17世紀前半のものであると考えられる。



第52図　３区遺構外出土遺物

参考文献

（１）岸　道三『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997
島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会
（２）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」（『島根考古学会誌　第11集』1994　島根考古学会）
（３）赤澤秀則『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』1992　鹿島町教育委員会
（４）松本岩雄「出雲・隠岐」（『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』1992　木耳社）
（５）墨書木札の釈文については島根県立博物館の岡　宏三氏にお願いした。釈文の詳細については「Ⅴ　まとめ」に掲載している。
（６）高橋智也『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　天神遺跡（第10次調査）』2002
島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会
（７）大井谷Ⅱ遺跡で同様の擂鉢の出土がみられる。
（８）第７次・10次調査で自然河道の存在が確認されている。前掲註（１）（６）

V　まとめ

平成６年度（第７次調査）、11年度（第10次調査）に引き続いてＪＲ高架沿線の発掘調査を実施した。今回の調査では過去２回の調査で検出された遺構の続きを検出した上、その下層の遺構についても調査を実施することができた。第12次調査の成果については前項で報告したが、この項では過去の調査成果も含めて天神遺跡の中・近世遺構についてまとめておこうと思う。

１．第７次・第10次・第12次調査

３次にわたる調査の結果、遺構面は４面あることが判明した。暗オリーブ褐色砂質土層（標高6.4m～6.5m）をベースとする第１遺構面、黒褐色砂質土層（標高6.0m～6.1m）をベースとする第２遺構面、オリーブ黒色粘土（標高5.7m～5.8m）をベースとする第３遺構面、黄灰色シルト層（標高5.4m～6.0m）をベースとする第４遺構面である。各遺構面ごとにみていこう。

第１遺構面

近代の遺構と考えられる道状遺構、畝状遺構が検出されている。

この遺構面は鉄道敷設時の盛土の直下にあるため、場所によってはその際の削平が深く及んでおり遺構が残存していないところも多い。

畝状遺構は調査区北側は攪乱も大きく必ずしも遺構残存状況が良いとは言えないものの、その痕跡が調査区北端でも認められており、調査区外に続いていくと思われる。一方、南側についても調査区外へと続いていると考えられる。

第２遺構面

第12次調査３区でのみ認められた遺構面である。黒褐色砂質土（標高6.0m～6.1m）をベースとしており、第１遺構面の畝状遺構によく似た形状の遺構を検出している。検出した遺構の上面が攪乱であったために畝状遺構が削平されて下部が残存したものの可能性も残されている。しかし、出土遺物が全くないために第１遺構面・第２遺構面間の時期比較ができず、便宜上第２遺構面とした。

第３遺構面

中世の石敷遺構以外の遺構は認められていない。この遺構面はほとんどが粘土であり、石敷遺構が形成された時期には湿地帯であったと考えられる。

第４遺構面

地表から約2.3m程下のレベル（標高約６m）で検出されるため、安全確保のために第７次調査及び第10次調査ではこの遺構面まで調査を実施していないが、第12次調査においては矢板に切梁の設置があったため、下層まで調査することができた。

第12次調査アクセス道部分ＳＫ０３及び第12次調査２区ＳＸ０１からは中世土師器の出土がみられるため、この遺構面の時期は古代までさかのぼることはないと思われるが、その他の遺構内からの遺物は細片の上ごく少量であり、遺構の時期を決定する根拠に乏しい。また、調査区が狭いために遺構の性格を把握することは困難であった。

第12次調査のアクセス道部分についても同遺構面から遺構の検出がみられているために、第７次・第10次調査地を含めてこの遺構面が広がりを持っていると考えられるが、先に述べた理由により第７次・第10次調査時には調査を断念せざるを得なかったのは残念である。この周辺についてはその調査範囲が限定されているために詳細については不明な点が多く、周辺の調査成果を待たなければならない。

ただし、井戸など生活に根付いた遺構が検出されていることからも中世期においてこの周辺に集落の存在していた可能性は高いと考えられる。

２．石敷遺構・道状遺構について

天神遺跡の調査で検出された中・近世遺構の中でも代表的なものが道状遺構と石敷遺構である。道状遺構は近世以降、石敷遺構は中世と時期の別はあるが、石敷遺構のすぐ真上に道状遺構が位置しており、その平面はほぼ合致することからみて同一の性格を持った遺構であることが考えられる。

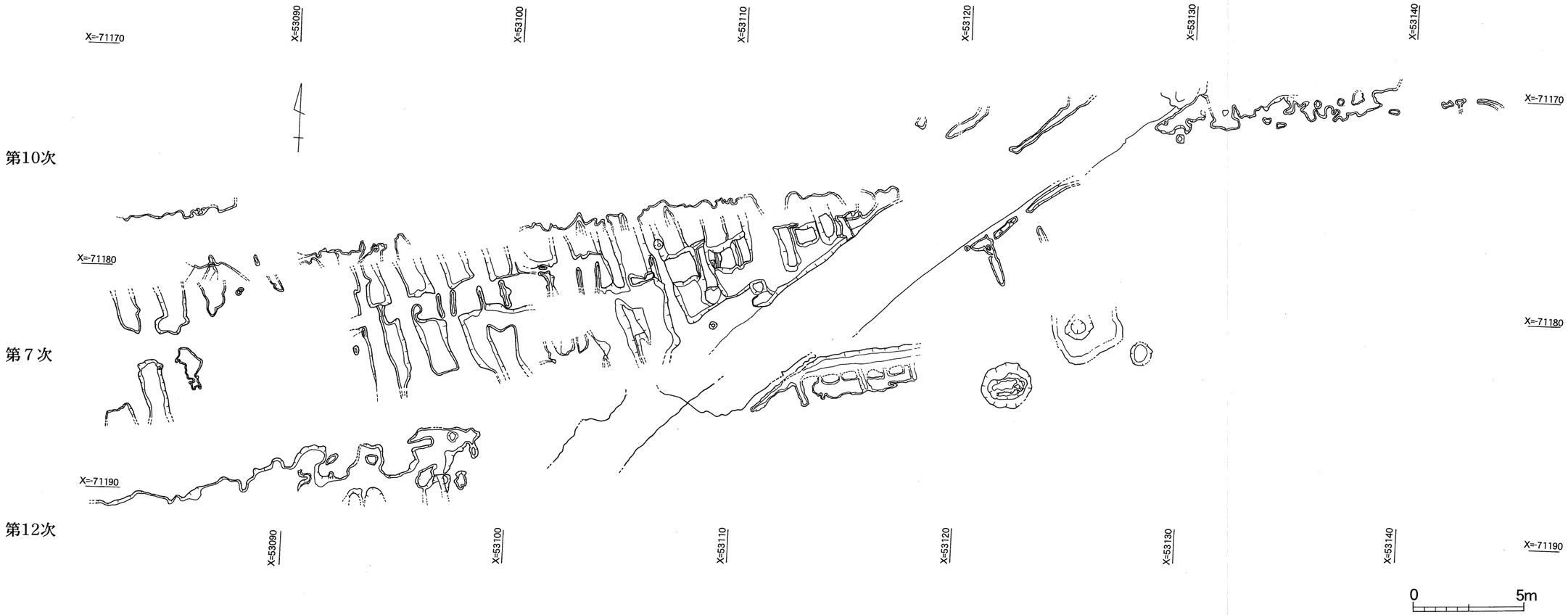
遺構の性格としてはその遺構名どおり道としての利用が考えられる。中世に石敷遺構が造られ、道として利用していたものを近世以降になって付け替えたものと考えられよう。

さて、この道は当時の交通網上、どのような位置を占めていたのであろうか。天神遺跡周辺でこの時期に主要道となっていたのは「石州街道」である。この「石州街道」は今市町方面より西へ延び、追分一里塚より南へ折れ、古志方面へと至る道路[1]である。今回、検出した石敷遺構・道状遺構は追分一里塚の西方に位置し、石州街道方向へと遺構は延びている。

これらのことから、「石州街道」を主要道と捉えると、これらの遺構は「支道」と考えることができよう。「石州街道」から離れていくにつれ徐々に細くなる傾向もみられ、「支道」であることを示していると考えられる。

参考文献

（１）落合久栄「幕末の測量士　伊能忠敬　塩冶を歩く」（『えんや物語』2001　塩冶公民館文化部）


X=-71170
X=53090
X=53100
X=53110
X=53120
X=53130
X=53140
X=-71170
第10次
X=-71180
X=-71180
第７次
X=-71190
第12次
X=53090
X=53100
X=53110
X=53120
X=53130
X=53140
X=-71190
0
5m

第53図　Ｄ区合成図

天神遺跡第12次調査出土墨書木札の釈文について

島根県立博物館　岡　　宏　三

平成12年度の山陰本線南沿線設置工事に伴う調査によって、２点の墨書木札が道状遺構包含層（近世～近代）から検出されている。

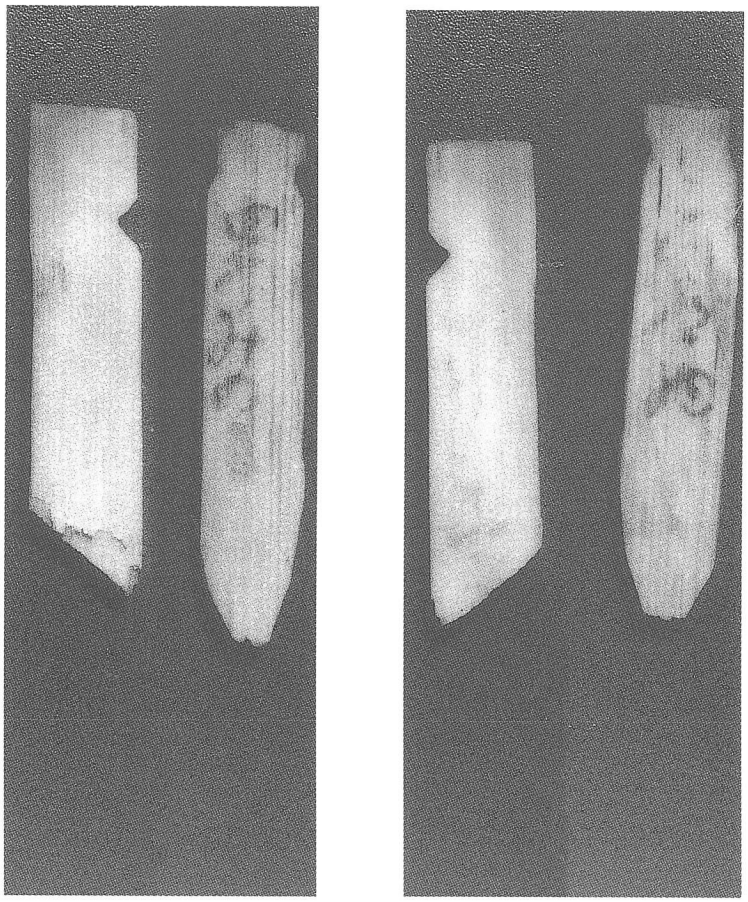
１は、裏面に若干の墨書の痕跡が確認されるが、不鮮明なため特定にいたらなかった。

２は、表に「□□□物」とあり、上部２文字分は痕跡が薄いため判読不能。３字目は下部の字形から「道」「常」「有」「明」「尋」「荷」などの字が想定されたが、いずれにも断定し難い。裏面には「四升みの」と記されており、こちらは墨痕の残存状況が良好である。

これら２点の木札の内、２の裏面、「みの」に着目してみたい。直前に「四升」とあることから、量を伴う物質の名称であることは明らかである。ここで想起されるのは享保20年（1735）５月に作成された「神門郡組下村々産物書出寄帳」（出雲市図書情報センター所蔵）である。

「神門郡組下村々産物書出寄帳」は、当時神門郡内でみられた動植物を書き出したものであり、出雲市図書情報センターに所蔵されているものは、松江藩に提出されたものの控えである。本資料の内、穀類としては、稲40種（早稲５種、中稲13種、晩稲11種、餅稲11種）、粟14種、稗５種、黍３種、小麦６種、大麦７種、蕎麦２種、大豆13種、黒大豆３種、青大豆２種、赤小豆７種、大角豆８種、かつら豆３種、冬大豆の合計114種が書き出されている。ここで注目されるのは中稲である。中稲の項をみると、「みの」という名が見え、18世紀前半当時、神門郡で「みの」の品種名を持つ中稲が栽培されていたことが判明するのである。

もし２の「みの」が中稲の品種をさすのであれば、穂籾用ではなかったろうか。年貢米など精米されたものに対して、品種名を付した文献の事例を少なくとも中近世に関していえば聞いたことがないからである。４升であれば、一般に四斗の容量のある俵に入れられるには余りにも少ない量である。恐らくカマス等のものに入れられ、４の木札はそれに付されたものであったろうと推測されてくるのである。



第12次調査出土墨書木札　赤外線写真

出土遺物観察表

（　）内は復元径及び残存高である。

アクセス道部分

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
9-1	SD01	須恵器 甕	－	－	(4.4)	内面：ナデ 外面：波状文	内外面：青灰色	密	良好	外面に２条の沈線、クシ描波状文
9-2	SD01 黒褐色 粘質土	陶器 ぐい呑み	5.3	2.7	4.8	内面：施釉 外面：施釉 ナデ	施釉部分：明褐色 無釉部分：にぶい 黄橙色	０．５㎜以内の砂粒を少量含む	良好	
11-1	SD02	土師器 皿	－	(5.0)	(0.8)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい 黄橙色	１㎜以内の砂粒を少量含む	良	底部糸切り
11-2	SD02	陶器 碗	－	(3.8)	(1.6)	内面：施釉 外面：横ナデ	内面：にぶい黄橙色 灰白色 外面：灰黄褐色	０．５㎜以内の砂粒を若干含む	良好	
19-1	1Gr 攪乱土	陶器 猪口	(5.6)	(3.8)	(3.0)	内面：施釉 外面：施釉 横ナデ	施釉部分：赤褐色 無釉部分：橙色	密	良好	口縁部には釉が厚めに塗られる
19-2	排土中	陶器 碗	－	(5.8)	(1.5)	内面：施釉 外面：横ナデ	内外面：浅黄色	密	良好	
19-3	攪乱土	陶器 擂鉢	－	(14.6)	(4.8)	内面：施釉 外面：ナデ	内面：暗赤褐色 外面：橙色	密	良好	内面に１０条１単位の擂目が入り摩耗する

１区

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
24-1	3Gr ｐ４	瓦質土器 壺	－	－	(4.4)	内面：横ナデ 外面：横ナデのち列点文	内外面：暗灰色	０．５㎜以内の砂粒を少量含む	良好	外面に列点文
24-2	2Gr	磁器 碗	(12.0)	－	(3.1)	内外面：施釉	内外面：乳白色	密	良好	内外面ともに釉薬にムラがみられる
24-3	1Gr SX01	陶器 碗	－	(3.4)	(3.3)	内外面：施釉	内外面：明青灰色	密	良好	高台底面は無釉 外面に茶色の模様が入る
24-4	1Gr 黄褐色 土	磁器 碗	－	(4.1)	(2.5)	内外面：施釉	内外面：灰白色	密	良好	外面に藍色で染付 高台の染付は緑がかっている
24-5	1Gr 遺構面	磁器 皿	－	(5.5)	(1.4)	内外面：施釉	内外面：灰白色	密	良好	見込み部分に藍色の染付 高台底面は無釉
24-6	攪乱土	陶器	－	(13.9)	(9.2)	内面：ナデ 外面：施釉	内面：灰白色 外面：乳白色	密	良好	外面に藍色の染付
24-7	1Gr サブトレ 表採	陶器 土瓶？	(10.0)	－	(5.2)	内面：ナデ 外面：施釉	内面：にぶい黄橙色 外面：黄色	密	良好	外面に把手取付け部分の痕跡あり

挿図番号	出土地点	器高	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
28-1	15Gr～第２遺構面上包含層	弥生土器広口壺？	－	－	(5.0)	内面：ユビオサエ 外面：ハケ目	内外面：灰黄褐色	１㎜程度の砂をやや含む	良好	５条の断面半円形の沈線が入る 縦方向のハケ目の上から４条の強いハケ目を「ノ」字に施す
28-2	8Gr 第１遺構面掘り下げ層	土師器皿 or 坏	－	(5.3)	(1.6)	内面：横ナデ ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	外面：灰黄褐色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	やや不良	
28-3	10Gr 第１遺構面掘り下げ層	土師器皿 or 坏	－	(3.8)	(0.9)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰黄褐色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	やや良	
28-4	7Gr 第１遺構面掘り下げ層	土師器皿？	－	(4.0)	(0.9)	内面：ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：橙色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	やや不良	１３世紀～１４世紀 （島根中世３期） （蔵小路西３期） 内面に化粧土？
28-5	7Gr 第１遺構面掘り下げ層	土師器皿？	－	(4.6)	(0.6)	内面：横ナデ ナデ 外面：横ナデ？ 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	良好	
28-6	9Gr 第１遺構面掘り下げ層	須恵器坏身	－	－	(1.6)	内外面：横ナデ	内外面：灰白色	１㎜程度の砂をわずかに含む	良好	古墳時代後期後半 （出雲５～６期）
28-7	7Gr 第１遺構面掘り下げ層	陶器擂鉢	－	－	(4.6)	内外面：横ナデ	内外面：にぶい赤褐色	１㎜程度の砂をわずかに含む	良好	備前焼？ １４世紀 （備前Ⅲ期？） 若干ゆがみがあり、片口部分の可能性あり
28-8	8Gr 第１遺構面掘り下げ層	焙烙？	(29.4)	－	(6.3)	内面：横ナデ 外面：横ナデ ヘラケズリ オサエ？	内面：にぶい黄橙色 外面：暗灰色	１㎜程度の砂をわずかに含む	やや良	外面にスス付着
28-9	1Gr 第１遺構面掘り下げ層	陶器擂鉢	－	(11.4)	(2.7)	内面：擂目 外面：横ナデ	内外面：灰褐色	１㎜程度の砂をわずかに含む	良好	
28-10	3区 第１遺構面掘り下げ層	陶器坏？	－	(9.6)	(2.7)	内面：施釉 外面：施釉 ナデ	施釉部分：灰白色 無釉部分：浅黄色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	良好	
28-11	8Gr 第１遺構面掘り下げ層	陶器	(9.0)	(6.5)	(1.5)	内外面：ナデ？	内外面：にぶい黄橙色	極めて密	良好	外面口唇部に釉を施す
28-12	3区 第２遺構面	陶器高台付碗 or 坏	－	－	(1.9)	内外面：施釉	施釉部分：オリーブ灰色 無釉部分：灰褐色	極めて密	良好	高台部底面については無釉

挿図番号	出土地点	器高	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
28-13	9Gr 第１遺構面 掘り下げ層	磁器 碗	(13.0)	－	(3.1)	内外面：施釉	内外面：灰白色	極めて細かい	良好	内面に青色で格子文の染付あり
28-14	10Gr 第１遺構面 掘り下げ層	磁器？ 碗	－	(4.8)	(3.3)	内外面：施釉	内外面：灰白色	極めて密	良好	伊万里焼 外面底部に１条の青色の円形染付あり
29-1	13Gr 第２遺構面 遺構内	土師器 甕？	(18.2)	－	(3.5)	内外面：横ナデ	内外面：にぶい黄橙色	２㎜程度の砂を多く含む	やや良好	
29-2	9Gr 畝状遺構 Ｂベルト２層	弥生土器 甕	(18.2)	－	(4.5)	内外面：不明	内外面：灰黄褐色	１～２㎜の砂を多く含む	不良	弥生時代後期（草田１期） 風化著しい 外面肩部にススの付着 口縁拡張部外面には凹線の痕跡あるが不明瞭
29-3	15Gr 第２遺構面 畝状遺構	弥生土器	－	(7.0)	(4.3)	内面：不明 外面：ヘラミガキ ナデ？	内面：暗灰色 外面：黄灰色	１㎜以下の細粒を多く含む	やや良	外面に黒斑 内面に炭化物？付着
29-4	14Gr 第２遺構面 遺構内	土師器 皿 or 坏	－	(6.5)	(1.1)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	密	やや良	
29-5	13Gr 第２遺構面 遺構内	土師器 皿 or 坏	－	(5.9)	(1.1)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰白色	１㎜程度の砂をわずかに含む	やや不良	
29-6	16Gr 第２遺構面 畝状遺構？	陶器 坏 or 碗	－	(4.2)	(1.4)	内面：ナデ 施釉 外面：回転ナデ	内外面：にぶい黄橙色	１㎜以下の黒色細粒をわずかに含む	良好	内面に一部施釉
29-7	14Gr 第２遺構面 遺構内	陶器 碗	－	－	(2.3)	内外面：施釉	内外面：浅黄色	密	良好	
30-1	13Gr SK06	陶器	－	(5.3)	(2.7)	内外面：施釉	施釉部分：灰オリーブ色 無釉部分：にぶい赤褐色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	良好	体部に周囲より濃い１条の線がある
31-1	15Gr 第２遺構面 掘り下げ層	弥生土器 広口壺	－	－	(1.0)	内面：不明 外面：横ナデ	内外面：にぶい黄橙色	１㎜程度の砂を多く含む	やや不良	弥生時代中期中葉（松本Ⅲ－１） 口縁拡張部に１単位４条の斜格子文 口縁拡張部上端に刻目
31-2	8Gr 第３遺構面上包含層	土師器 皿？	－	(4.0)	(0.7)	内面：回転ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	１㎜以下の白色細粒をわずかに含む	やや良	

挿図番号	出土地点	器高	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
31-3	9Gr 第２遺構面掘り下げ層	土師器 皿？	－	(5.0)	(0.8)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	１㎜以下の細粒をわずかに含む	やや不良	１３世紀後半？（蔵小路西３期）
31-4	7Gr 第２遺構面掘り下げ層	土師器 皿 or 坏	－	(5.0)	(0.8)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：浅黄橙色	１㎜以下の白色細粒をわずかに含む	やや良	
31-5	15Gr 第２遺構面掘り下げ層	須恵器 高台付坏	－	(11.2)	(1.7)	内外面：横ナデ ナデ	内外面：灰色	１㎜以下の細粒をやや含む	良好	
31-6	8Gr 第３遺構面上包含層	土師器 皿 or 坏	－	(5.1)	(1.2)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰白色	密	やや不良	
31-7	8Gr 第３遺構面上包含層	土師器 坏？	－	(7.7)	(1.3)	内外面：不明 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	１㎜以下の黒色細粒をやや含む	やや不良	
31-8	8Gr 第３遺構面上包含層	陶器 擂鉢	(25.3)	－	(4.5)	内外面：横ナデ	内外面：灰赤色	１㎜程度の砂をわずかに含む	良好	肥前系 内面に４条１単位の擂目
34-1	12Gr 石敷遺構	土師器 皿	(7.6)	(4.2)	(1.6)	内外面：横ナデ 底部：糸切り？	内外面：浅黄橙色	１㎜以下の白色細粒をわずかに含む	やや不良	１３世紀？（蔵小路西２～３期？）
34-2	10Gr 道状遺構面	陶器	－	(9.1)	(3.5)	内面：横ナデ 外面：ケズリ	内外面：褐灰色	１㎜以下の白色細粒をわずかに含む	良好	
35-1	4Gr 灰オリーブ色シルト層	土師器 皿	－	(5.4)	(1.3)	内外面：ナデ 底部：糸切り	内外面：浅黄橙色	０．５㎜以下の細粒を含む	良	内面底部は非常に粗く整形する
35-2	4Gr 灰オリーブ色シルト層層	土師器 焙烙	(36.5)	－	(3.2)	内外面：ナデ	内面：浅黄橙色 外面：にぶい黄橙色	密	良好	外面底部は未調整
35-3	6~7Gr 灰オリーブ色シルト層	陶器 碗？	－	(3.8)	(1.5)	内外面：不明	内面：灰白色 外面：灰白色 淡黄色	密	良好	内外面、高台底部とも化粧土？が付着 高台外面にこげ茶色の染付
35-4	5Gr 灰オリーブ色シルト層	陶器 土瓶	－	(7.4)	(2.5)	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 施釉	内外面：灰色	密	良好	外面胴部に若干釉が残るため、胴部上半は施釉されていたと思われる
36-1	6Gr 黒色粘土	弥生土器 壺	(14.3)	－	(3.1)	内外面：ナデ	内外面：灰白色	１㎜以下の砂をわずかに含む	やや良	弥生時代中期中葉（松本Ⅲ？） 外面に刻目

挿図番号	出土地点	器高	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
36-2	3Gr 黒色粘土	弥生土器 甕	(18.6)	—	(5.4)	内外面：不明	内外面：明黄褐色	1㎜以下の細粒をわずかに含む	不良	弥生時代後期後半（草田4～5期）ただし古い要素を持つ（口縁拡張部の貝殻施文等）
36-3	3Gr 黒色粘土	弥生土器 壺	(18.0)	—	(7.5)	内面：ナデ ケズリ？ 外面：ナデ	内外面：浅黄橙色	1～2㎜程度の砂粒を多く含む	不良	弥生時代後期後半 風化著しい
36-4	7Gr 黒色粘土	土師器 擂鉢	—	(7.9)	(2.7)	内外面：ナデ 底部：ヘラおこしのちナデ	内外面：橙色	密	不良	内面に擂目 擂目は不規則で摩耗している
36-5	5Gr 黒色粘土	土師器 坏	(14.8)	—	(2.3)	内外面：ナデ	内外面：灰黄色	0．5㎜程度の細粒を若干含む	やや不良	15世紀代（島根中世V期）（蔵小路西4期）
36-6	7Gr 黒色粘土	土師器 皿	—	(3.6)	(0.7)	内外面：ナデ 底部：糸切り	内外面：灰白色	密	やや不良	
36-7	7Gr 黒色粘土	土師器	—	(5.9)	(1.5)	内外面：ナデ 底部：糸切り	内外面：暗灰黄色	0．5～2㎜程度の砂粒を多く含む	やや不良	
36-8	5Gr 黒色粘土	須恵器 壺	(12.7)	—	(3.3)	内外面：ナデ	内外面：灰白色	密	良好	一部灰を被り釉化する
36-9	6Gr 黒色粘土	陶器 碗	—	(5.0)	(2.2)	内面：施釉 外面：施釉 ナデ	内外面：灰白色	密	良好	肥前系 外面底部、高台部は調整が非常に粗い 内面見込みに釉着
36-10	7Gr 黒色粘土	陶器 碗	—	(5.5)	(1.7)	内面：施釉 外面：ナデ	内面：黄色 外面：にぶい黄橙色	密	良好	
37-1	9Gr 石敷遺構面～最下遺構面包含層	土師器 皿 or 坏	—	(5.0)	(1.1)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	1㎜程度の砂をわずかに含む	やや良	
37-2	9Gr 石敷遺構面～最下遺構面包含層	土師器 皿 or 坏	—	(5.0)	(1.0)	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内面：灰黄褐色 外面：にぶい褐色	1㎜以下の白色細粒をわずかに含む	やや良	
37-3	11Gr 黒色粘土（石敷遺構下）	土師器 坏	13.3	4.1	6.3	内外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰黄褐色	1㎜程度の砂をわずかに含む	やや不良	15世紀？（古志本郷坏C類？） 外面に黒斑 風化著しい
37-4	11Gr 黒色粘土（石敷遺構下）	土師器 坏	13.8	7.1	3.7	内面：不明 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰黄褐色	1㎜以下の細粒をやや含む	やや不良	15世紀？（古志本郷坏C類？） 底部内面に渦巻状のオサエ痕（ロクロで回しながら押さえたものか？）
37-5	8Gr 黒色粘土（石敷遺構下）	土師器 鉢？	(28.1)	—	(5.4)	内面：横ナデ ヘラケズリのちナデ 外面：横ナデ ハケ目	内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい橙色	1㎜程度の砂をやや含む	良	外面に丹彩 内面に黒斑

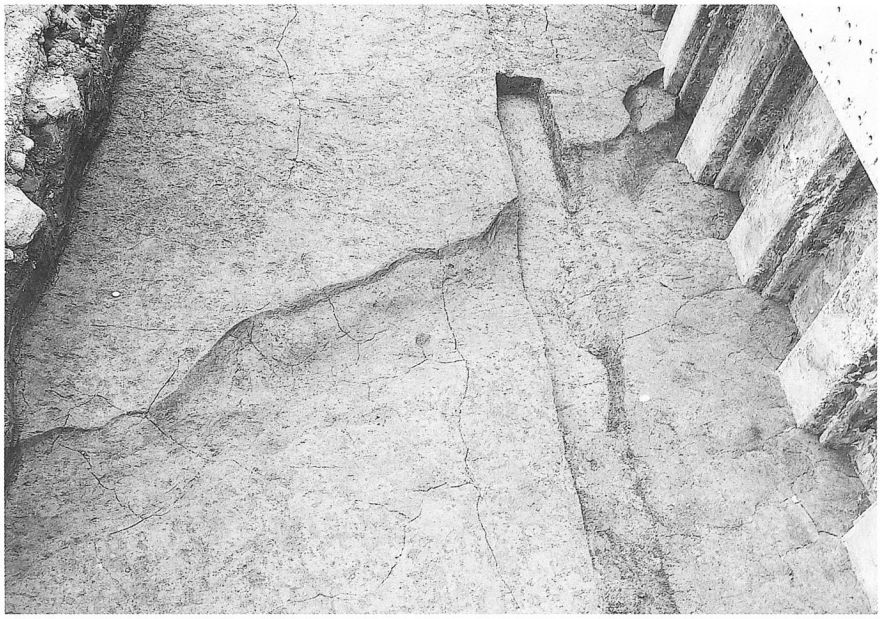
挿図番号	出土地点	器高	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
37-6	16Gr 石敷遺構面～最下遺構面	須恵器 高坏	－	－	(2.6)	内面：ナデ 外面：横ナデ ナデ	内外面：灰色	1㎜以下の細粒をやや含む	良好	
37-7	13Gr 石敷遺構面下	陶器 碗？	－	－	(2.5)	内面：ナデ 外面：施釉	施釉部分：黒色 無釉部分：にぶい黄褐色	極めて密	良好	
37-8	9Gr 石敷遺構面～最下遺構面包含層	磁器 皿 or 坏	－	(5.8)	(1.7)	内面：施釉 外面：横ナデ オサエ？	内面：灰白色 外面：灰色	1㎜以下の黒色細粒をわずかに含む	良好	白磁 （11世紀後半～12世紀） 中国製
37-9	13Gr 石敷遺構面下	磁器 碗	－	－	(2.7)	内外面：施釉	内外面：灰白色	密	良好	内外面に青色染付あり
46-1	8Gr SK09	土師器 擂鉢	24.7	12.0	11..9	内面：擂目 外面：横ナデ ケズリ	内外面：淡黄色	1㎜程度の砂をわずかに含む	やや不良	外面をヘラで強くこする 外面底部は粗い整形のみ 内面に1単位6条の擂目を施す 一方向に注口あり 内面下半は使用による擂目の摩耗が大きい 底部に穴があくが摩耗によるものか、意図的なものかは不明
48-1	1Gr SE01	土師器 坏	(18.4)	－	(2.0)	内外面：回転ナデ	内面：灰黄色 外面：灰白色	1㎜以内の細粒を含む	良好	
48-2	1Gr SE01	土師器 坏 or 皿	－	－	(1.2)	内外面：不明	内外面：灰黄色	1㎜以内の細粒を多く含む	良	
48-3	1Gr SE01	土師器 坏 or 皿	－	(5.9)	(1.3)	内外面：回転ナデ 底部：糸切り	内面：にぶい黄橙色 外面：灰白色	2㎜以内の細粒を多く含む	良	
48-4	1Gr SE01	土師器 坏 or 皿	－	(4.6)	(1.8)	内外面：横ナデ？ 底部：糸切り？	内面：灰白色 外面：灰黄色	1㎜以内の細粒を含む	良	
48-5	2Gr SE01	土師器 坏 or 皿	－	－	(0.7)	内面：回転ナデ 底部：糸切り	内外面：黄灰色	密	良好	
48-6	1Gr SE01	須恵器 坏	－	－	(3.2)	内外面：回転ナデ	内外面：灰白色	2㎜以内の細粒をわずかに含む	良好	
49-1	7Gr SE02	土師器 皿 or 坏	－	(4.2)	(0.9)	内面：横ナデ ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰白色	密	不良	13世紀前半 （島根中世Ⅲ期？） （蔵小路西2期？）
51-1	5Gr	甕	(31.7)	頸部径 (27.6)	(7.8)	内面：ハケ ケズリ 外面：ハケのちナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい黄褐色	1㎜以下の細粒を含む	良	
51-2	5Gr	土師器 坏	－	(5.4)	(3.1)	内外面：不明 底部：糸切り？	内外面：明黄褐色	密	やや不良	
51-3	5Gr	土師器 坏	－	(6.2)	(3.3)	内外面：ナデ 底部：糸切り	内外面：淡黄色	密	やや不良	外面、底部に丹彩の痕跡あり

挿図番号	出土地点	器高	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
51-4	3Gr 攪乱土 除去後 上層面 表採	須恵器 高坏	—	(15.4)	(1.9)	内外面：ナデ	内面：青灰色 外面：暗青灰色	密	良好	
51-5	2区 攪乱土 内	磁器 碗	(10.4)	4.1	5.4	内外面：施釉	内外面：灰白色	密	良好	外面に藍色で竹、松、梅などの染付 内面には雷文、見込みには草などの模様、高台部にはラインの染付
51-6	2区 攪乱土 内	陶器 擂鉢	(32.4)	—	(9.8)	内面：施釉 外面：施釉 ナデ	施釉部分：暗赤褐色 無釉部分：灰黄色	密	良好	内面に擂目
51-7	2区 攪乱土 内	陶器 擂鉢	(34.9)	—	(5.5)	内外面：施釉	内外面：赤黒色	密	良好	内面に擂目
51-8	2区 攪乱土 内	陶器 擂鉢	(37.3)	—	(5.6)	内外面：施釉	内外面：極暗赤褐色	密	良好	内面に擂目 擂目上方に釉薬が波状に施される
51-9	攪乱土	陶器 擂鉢	—	(13.8)	(6.5)	内面：施釉 外面：施釉	内面：極暗赤褐色 外面：にぶい黄橙色	密	良好	内面に擂目 外面上部にわずかに施釉の痕跡あり
51-10	攪乱土	陶器 擂鉢	—	(9.7)	(6.5)	内面：擂目 外面：施釉 ナデ 刻目	内面：浅黄橙色 外面：暗赤色	密	良好	外面高台部に刻目
51-11	2区 攪乱土	陶器 擂鉢	—	16.4	(8.5)	内面：施釉 外面：施釉 ナデ	施釉部分：暗赤色 赤黒色 無釉部分：橙色	密	良	内面に擂目
52-1	7Gr 北ベルト 第1～3遺構面	土師器 皿 or 坏	—	(4.6)	(1.3)	内面：回転ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい橙色	1㎜以下の赤色細粒をわずかに含む	良	
52-2	12Gr 攪乱土	陶器 坏	—	(5.5)	(1.8)	内面：施釉 外面：施釉 横ナデ ヘラオコシ？	施釉部分：にぶい黄橙色 無釉部分：にぶい橙色	1㎜程度の砂をわずかに含む	良好	高台底部の厚みは0．4～0．8㎝で、均一ではない

2・3区　木製品

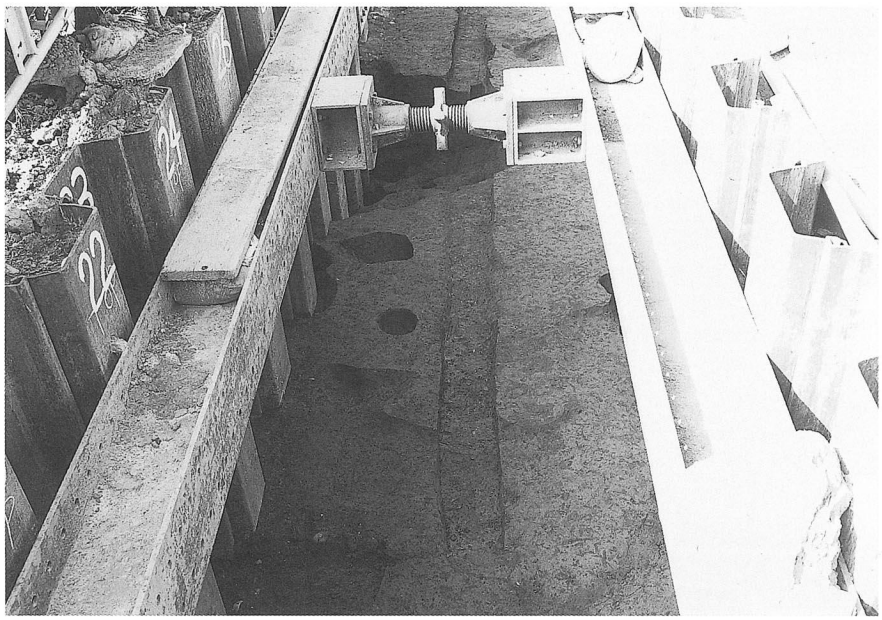
挿図番号	出土地点	製品名	樹種	法　量（cm）			備　　考
				最大長	最大幅	最大厚	
32-1	第２遺構面下～第３遺構面上	木簡	ヒノキ科アスナロ属	8.4	2.1	0.2	両面に墨書
32-2	第２遺構面下～第３遺構面上	木簡	ヒノキ科アスナロ属	9.5	2.0	0.4	両面に墨書

図　　版



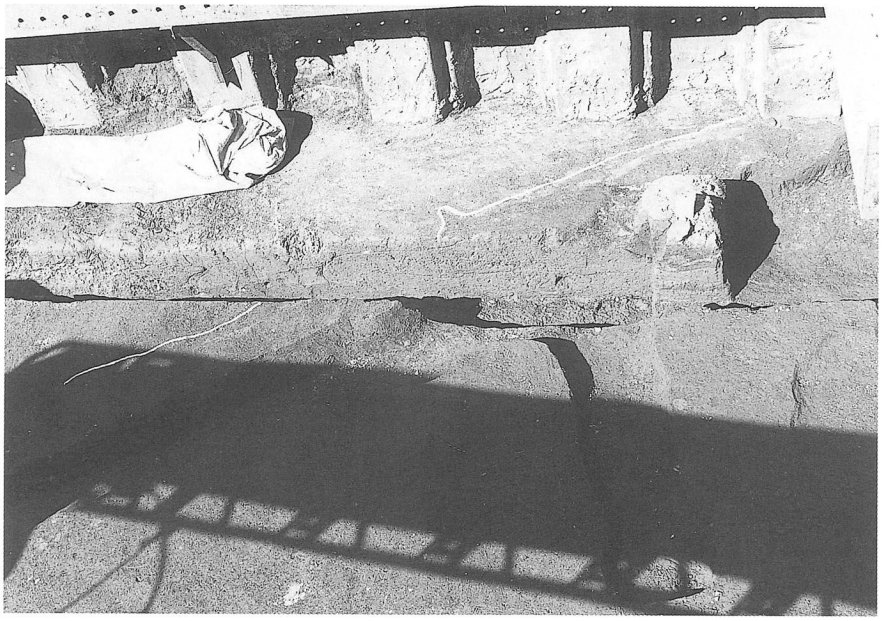
ＳＤ０１　完掘状況

ＳＤ０２　完掘状況

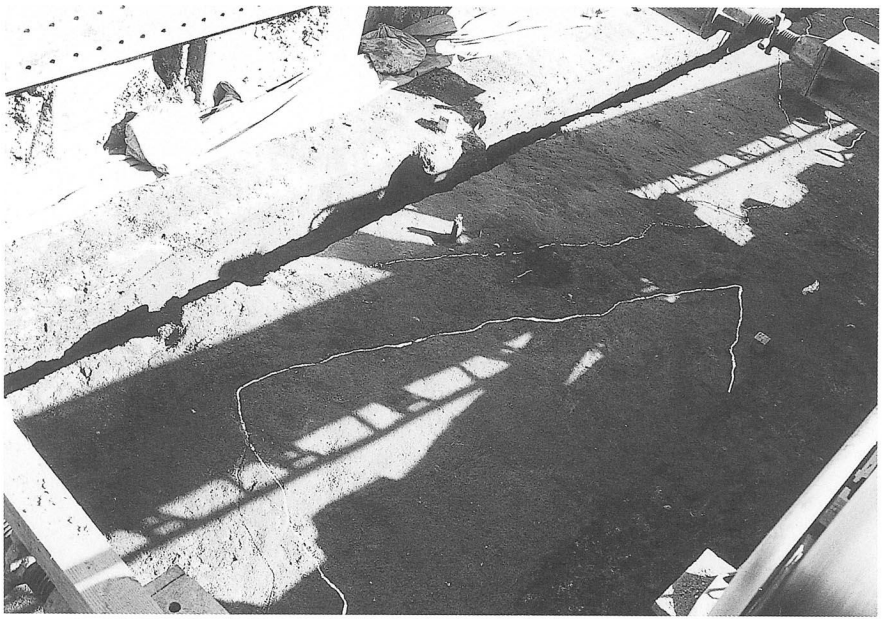


１Ｇｒ～２Ｇｒ　完掘状況

図版 2



道状遺構　側溝

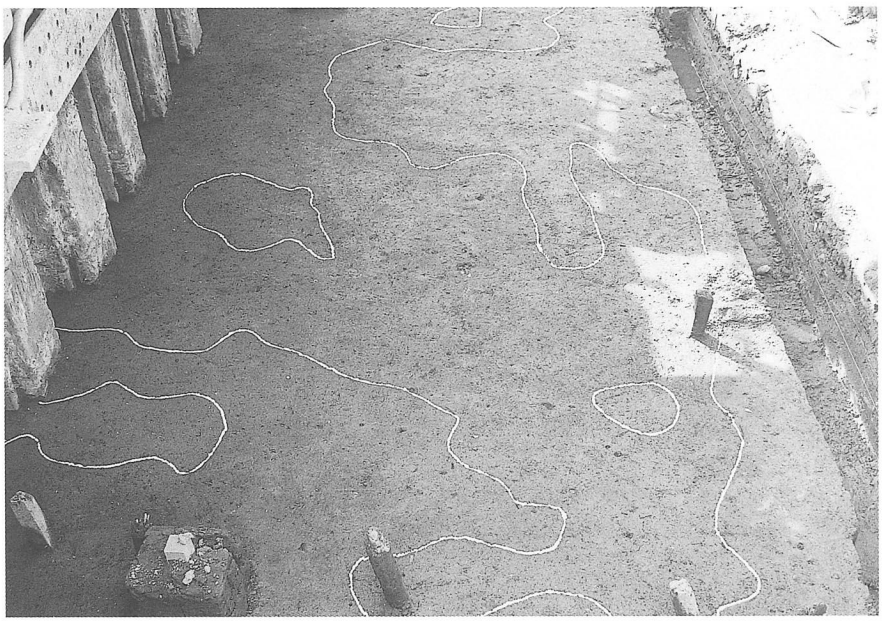


道状遺構　検出状況

畝状遺構　検出状況

畝状遺構　土層堆積状況

畝状遺構　完掘状況

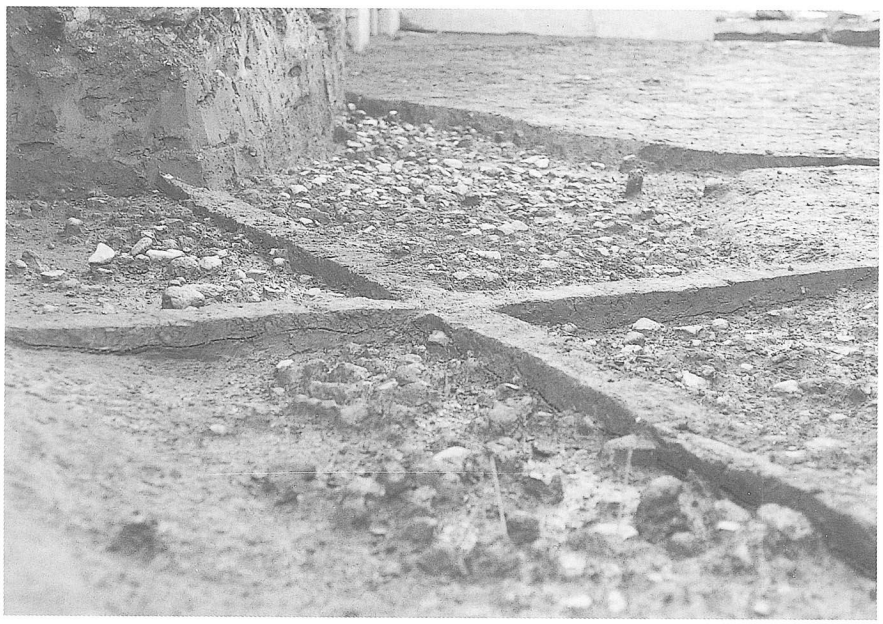


畝状遺構　検出状況
（第 2 遺構面）

図版４

畝状遺構　完掘状況
（第２遺構面）

石敷遺構　検出状況



石敷遺構　土層堆積状況

石敷遺構　完掘状況

ＳＫ０７　遺物出土状況

ＳＫ０７　遺物出土状況
（馬顎骨）

図版６

ＳＫ０７　完掘状況

ＳＫ０７・ＳＥ０２

ＳＫ０９　遺物出土状況

ＳＫ０９　遺物出土状況

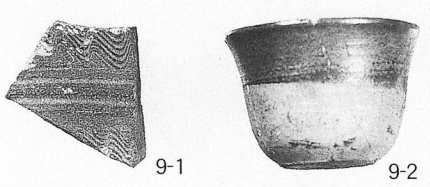
ＳＫ０９　完掘状況

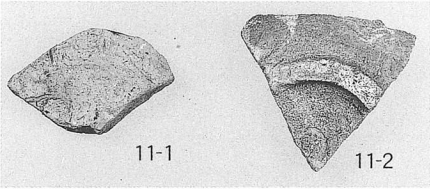
ＳＥ０１　遺物出土状況
（上層）

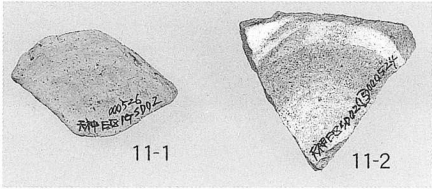
図版８

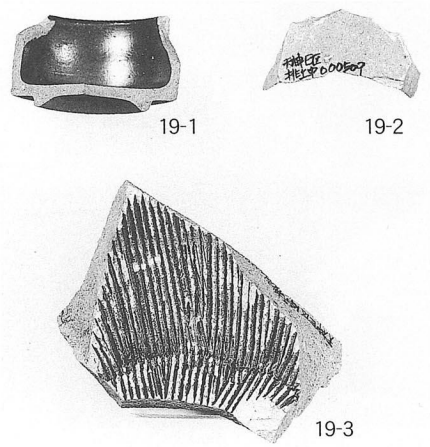
ＳＥ０１　検出状況

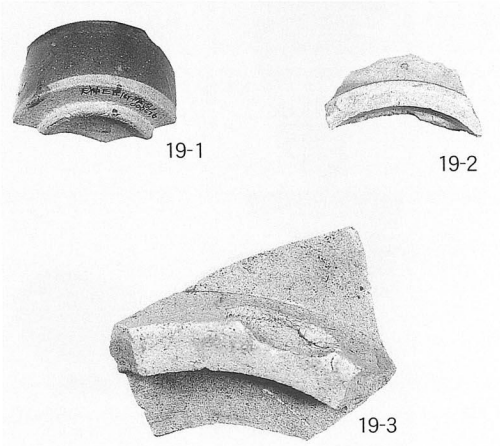
ＳＥ０２　完掘状況

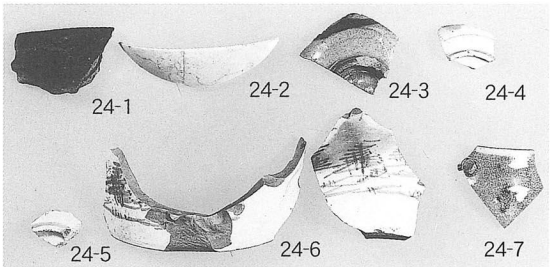

9-1
9-2

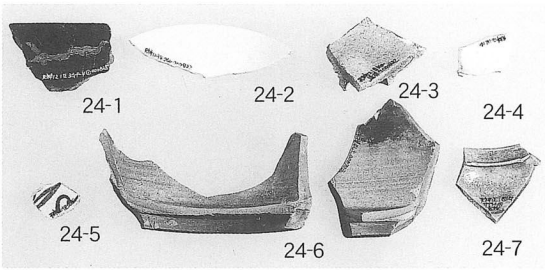

11-1
11-2

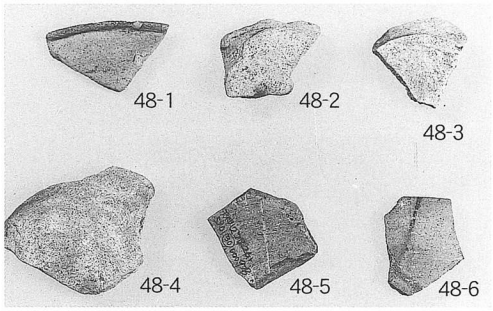

11-1
11-2

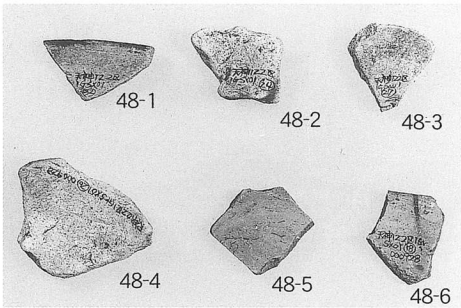

19-1
19-2
19-3

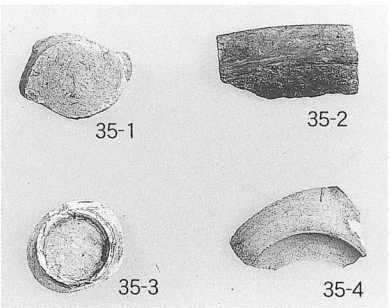

19-1
19-2
19-3

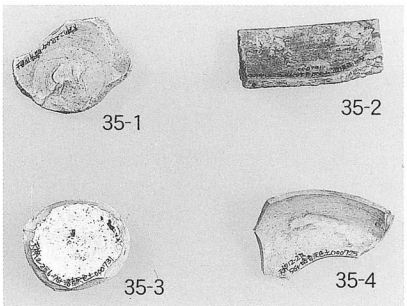

24-1
24-2
24-3
24-4
24-5
24-6
24-7


24-1
24-2
24-3
24-4
24-5
24-6
24-7


48-1
48-2
48-3
48-4
48-5
48-6


48-1
48-2
48-3
48-4
48-5
48-6


35-1
35-2
35-3
35-4


35-1
35-2
35-3
35-4